

クラス会および近況だより

下村 脩名誉博士顕彰記念館のご案内

館長 黒田 直敬(特)

去る2009年10月、2009年ノーベル化学賞の受賞者が発表されました。本学が歡喜に満ちた下村博士の受賞の知らせからもう1年経つのかと、時の過ぎ行く早さを痛感させられました。

2008年10月8日、ノーベル化学賞が「緑色蛍光タンパク質の発見と開発」に対して、下村 脩博士、Martin Chalfie 博士、Roger Y. Tsien 博士に授与されることを伝えるニュースは、皆様の記憶に深く刻まれていることと存じます。長崎医科大学附属薬学専門部(現・長崎大学薬学部)の出身(昭和26年卒)である下村博士の受賞のニュースに、日本中ではもとより長崎大学関係者は大きな興奮に湧きました。発表当日には、夜遅くまで報道関係者からの問い合わせの電話が殺到したことを、今も鮮明に思い起こされます。

下村博士は、受賞のニュース後、超多忙なスケジュールに追われていらっしゃいましたが、ご快諾をいただき、2009年3月22日には、長崎大学名誉博士称号授与式、ノーベル化学賞受賞記念講演が行われました。当日はあいにくの雨でしたが、長大生や長崎市の中高生を始め、大変多くの皆様にお集まり頂き、博士の講演「ノーベル賞受賞の原点 - 長崎大学」に熱心に聞き入っていました。講演会後には、下村博士ご夫妻、片峰学長、畑山学部長の列席のもと、下村 脩名誉博士顕彰記念館(以後、記念館)のオープニングセレモニーが執り行われました。



オープンセレモニーでのテープカット(2009年3月22日)

記念館は、博士の功績を称え、下村博士に続く若い科学者が博士の業績に触れることができるよう、黒田館長のもと柏葉会館内に下村 脩名誉博士顕彰記念展示室として建設されました。下村博士から提供していただいた資料や下村博士が在学時代に初めて投稿した論文を始めとする多くの貴重な資料を展示しています。以下に、主

な展示品をご紹介します。

・オワンクラゲ採集に実際に用いられた網(提供:下村博士)

網は、溶接にて強固に作成されており、細かい部分までおろそかにせず、丁寧に実験に取り組みれていた姿が想像されます。数年前に、ほとんどを処分してしまわれたとの事でしたが、残っていた貴重な網を快く提供していただきました。柄はプリンストン大学カラー(オレンジと黒)に塗られています。

・オワンクラゲ採集の最終年を記念して作成されたTシャツ(提供:下村博士)

オワンクラゲ採集は1967年に始まり、1988年までに計10万匹ものクラゲを採集されました。その最終年を記念して、作成されたTシャツを展示しています。胸に大きく描かれたオワンクラゲのイラストは、幸さん(下村博士の長女)がお描きになられたものです。

・GFP(Green fluorescence protein)

GFPの溶液及び解説のパネルを展示しています。実際に、紫外線を当て、GFPの緑色蛍光を観察することができます。GFPの鮮やかな蛍光を、是非、ご覧下さい。

・原著論文

下村博士が初めて投稿された論文を始め、ノーベル賞の受賞事由となった論文などを展示しています。長崎大学在学時代には、恩師である安永峻五教授(薬品分析化学教室)のもとで、無機金属の分離技術の開発に関する研究に携われ、その成果が、共著にて日本薬学雑誌に原著論文6報及び寄稿1報として投稿されています。

・ノーベル賞関連資料

ノーベル財団や共同通信の提供を受け、ノーベル賞受賞式及び受賞講演の際の写真パネルを展示しています。また、下村博士の提供によるノーベル賞のメダル写真や、賞状のパネルも展示しています。さらに、実際にノーベル賞受賞式で参加者に配布された案内や式次第、晩餐会の席次表などの資料も展示しています。

他にも、オープニングセレモニーの際に書かれたサインや同窓会への寄贈図書、博士に贈られた名誉博士の賞状、在学時代の写真、博士の受賞を伝える記事なども展示しています。また、一角には名誉博士の作成にあられた井川教授(長崎大学教育学部)の美術作品を展示しており、鮮やかな下村博士の功績に彩りを添えています。

展示室は、平日10時から17時まで、一般に公開してい

ます（入場料はもちろん無料です）。来学される折には、是非、足をお運びいただきますよう、お願い申し上げます。

最後になりましたが、展示室の準備にあたりましては



記念館内の展示風景

関係各位の多大なるご尽力を賜り、写真や資料など約80点余を所蔵することができました。特に、同窓生の皆様には、貴重な写真資料を快く提供していただきました。衷心より御礼申し上げます。



記念館の展示物

川 柳

田崎 和之（昭22）

化けました 万匹クラゲが ノーベルに

網を持つ 家族の腕も ノーベル賞

若き日の 一途八十路に 果報者

アメクラゲ 脩にかつがれ 長崎に

ハウステン クラゲもおらが サセボまち

人事を尽くして天命を待つ

今上 亨（昭25）

薬剤師道 一筋に 生き長らえて八十年
現役続けて六十年 天に任せた さだめ道

県病薬では 理事勸め 医薬分業 大目標
生涯教育 勉強会 名誉会長 推薦受く

市薬県薬 十四年 社団法人化 市薬会
副会長として 任尽くす 県薬会より 表彰状

県薬監事 七十歳 司会果たす 薬学会
率先導入 電算機 受けるは 県知事感謝状

第二の人生 薬局で 地域に尽くす 二十年
その功績は 認められ 輝く荣誉 有功賞

昭和25年長薬卒業以来、平成元年定年になるまで殆ど病院勤務、特に昭和42年からの22年間県病薬理事として過ごし、最後は佐世保地区長であり、日病薬より感謝状を頂く。昭和59年以後は市薬、県薬の理事を兼任し、市薬の中では副会長として社団法人化や市会営業局の設立や医薬分業、生涯教育に努力した。

平成2年に異例の調剤薬局を開設し県薬会より表彰状をうけた。九州山口薬学会では司会をさせられ県薬監事という重責を負う事になる。

70歳で公から身を引くことにしたが、その時、県知事感謝状をうけた。今回80歳を迎え日本薬剤師会より有功賞を頂きました。今後は天の命ずるままに、現在の任務を果たすまでだ。

2009 . 8 .

今年(平21)の長崎地区26卒会は

中倉 敬昭(昭26)

「出来が悪いクラスだ！」と言われていた旧長崎薬専最終クラスである昭和26年卒同級生の生き残りの中から、アメリカ在住の下村 脩君(同級生だから君付けとさせてもらう)が、2006年の朝日賞から昨年2008年は一躍、ノーベル化学賞受賞でした。正に快挙と言うべきでしょう。お陰で私ども出来の悪い26卒も、いくらかマシになった様な感じであります。

昨年は、同窓会長の伊豫屋先生から「下村先生祝ノーベル化学賞受賞記念特集号」としたい旨の通知がありましたので、私の無責任記は提出していません。

ところで、下村君が受賞したことで、昨年暮れの報道各社の攻勢には正直参りました。取材とはあんなものかとびっくりしました。長崎県の佐世保の果てで静かに暮らしている名も無き我が家にも、あっちこっちの新聞社やテレビ局などから、夜遅くまで何回も何回も電話です。後で分かったのは、私が所属している会社にまで電話があつて迷惑を掛けたいらしい。夜遅くまでとは、何たる事と次第に腹が立ってきたのですが、考えてみれば向こうさんもそれが仕事であります。グッと我慢でした。名も無き我が家にこれだけの激しい電話ならば、名も有る先輩、後輩や同級の諸先生には、もっともっと激しかったのではと思ったものです。

私自身は、本当の下村君をよく知らないのですが、甚だ申し訳ないが、彼の人柄は、各新聞に記載されているのを読むと、極めて謙虚で、無欲で、無口で、飾り気が無い、などは間違いないようです。彼の緑色蛍光蛋白質(GFP)が生命化学に応用されるようになり、貢献度が非常に高

いので今回の受賞になったのでしょうか、「このようになるとは思ひも寄らなかった。宝くじ当選のような受賞。」とあからさまに答えている。それに戦後に遡った話では「旧制5高受験に失敗して浪人した。」とあっさりのもうが、当時旧制5高を受験する人は大変に優秀な頭脳だったのです。更に薬専卒業後、製薬会社を受験したが「君は会社に向きませんよ。」と言われて諦めたとある。当時の製薬会社の研究室には、旧制高校や専門校3年間学の上に、更に4年間勉強したはずの旧制の東大や京大のエリートが若干採用されていた時代で、はっきり言えば、私ども薬専出身はナメられていたのです。つまり、採用されても、他の部署への配属でしょう。

オレが、オレがとしゃしゃり出る類いの人々が多いこの世の中で、謙虚で、あからさまで、飾らない彼の姿勢と発言は、心地よく救われるような気がしたものです。当分はいろんな所からお呼びがあつて、ご多忙と推察しますが、その彼もとくに傘寿を過ぎたヨワイになっているのは確かなのです。

さてこの辺で近況便りに移らねばならないのですが、学年理事で、この会の世話もしてくれていた篠田英夫君の体調がいま一つと言う事で、峰 唯信君に交代となり世話方をお願いすることになりました。大変ご苦労に存じています。実は、過日その峰君から会報への寄稿依頼がありましたので、例の無責任記で良ければというお許しを頂いて寄稿することになった次第です。

かつて、この会報でも、彼のプロフィールを少々記載したと思いますが、峰君と私は小野島時代、お寺の納骨堂の側に寝泊りしながら猛勉強(?)に励んだ盟友であり親友であります。国立長崎病院の薬剤部長を最後に退官した彼も、10月で83歳になったそうです。現在も変わらず、見事なマイカーの優良運転で、会社勤務の傍ら、老人会、OB会、同窓会等々の手伝いや世話を続けてお



平成21年4月26日 於 諏訪神社



平成21年4月26日 於 セントヒル長崎

られるという、正に好い意味でのバケモノ的な存在であり、そのエネルギーと情熱はどこから来ているのか。私のように何の手伝いもしない、そして峰君より若いのに、老化と共に情熱が薄れてゆく凡人とは、気の持ちようとか精神力というのか、所詮出来が違うのです。おそらくこれは高僧であられた彼のお父上の良いところのみの遺伝子を受け継がれたのでありましょう。

今回は、田中九王君と私がクラスで最も若い方の傘寿該当者で、諏訪神社に平成21年4月26日(日)に篠田、立石、峰、佐世保から貞方、中倉の5名が集まり、田中(天本)

君は欠席でした。セントヒル長崎の会食では本多君が加わり6名となりました。

残念ですが特筆すべきは、かつて小野島薬師時代に野球部の名捕手としてならし、老いてもなお颯爽としていた江頭文明君が昨年1月に亡くなったことです。痛恨の極みです。同窓の私どもは何とも気分が好ましくなく、寂しくなるのです。誰しも加齢だけは避けられません。個人差はありまじょうが、老化現象は仕方ありません。元気で集まりたいのは山々ですが人生一寸先は判らないというべきでしょう。

エッセイ 5 点

服部 俊明 (昭28)

文化勲章と年金の周辺

何時の頃からかノーベル賞受賞者には自動的に文化勲章授与が閣議決定され、陛下から拝受する仕来りが定着した。賞勲局の考えはノーベル賞受賞者に文化勲章を与えないのは整合性が取れないと思量したのだろう。ところがかつて大江健三郎さんが文化勲章を辞退したので一騒ぎとなった。次に反権力の瀬戸内寂聴さんは峻巡されたと思うが熟慮の上頂戴された。

その波紋からか以後は受賞を辞退する人は居ない。政府は文化勲章をノーベル賞なみに権威付けしたかったのだろう。さて文化勲章には毎年350万円の年金が付くのである。以前に核抜き本土並みの佐藤栄作元総理はノーベル平和賞を貰い一億数千万の賞金と多額の年金を貰うのが悩ましいと言ったので国民の輿論をかった。

それから数年前小柴昌俊さん76歳と田中耕一さん43歳が同じ年にノーベル賞を貰われた。そして同時に文化勲章年金が発生したのである。しかし年金受給期間を考えるとその差が余りにも大きいのに驚いた。平均寿命80歳とすれば小柴さんは4年で1400万円を、一方田中さんは残す余命は37年だから受け取る年金は1億2950万円になる。

ならば、ノーベル賞が今の研究ではなく過去30~40年に遡って業績が審査される訳で、そこを勘案すれば田中さんは非常に恵まれた率の良い受賞になる。しかし、国として一旦決めた事だし、目出度い話だから下衆の勘ぐりは止めることにしたい。

とにかく日本では偉い人、成功した人には生涯にわたり限りない栄誉が幾重にも付き纏う。その昔軍隊で戦死者の遺族年金は戦争指導者の大佐級では今でも2200万円、召集された若い下級兵は将来の逸失利益に関係なく二百数十万円だと言う。

また、ドイツでは遺族年金は一律300万円だそう。しかし一般地域住民の原爆や空襲での犠牲者には一切保障はない。不公平、不平等は歴史的には戦火の常である。

こうした梃子で科学や文化が発達して来た事もまぎれもない事実である。

肺がんバイアスによる心の軌跡

今日無事と毎日感謝の気持ちで送っている所に、一般地域住民の肺がんの健康診断が行われた。忘れた頃、区役所から間接撮影の診断結果が送付されて来た。なんとそこには「怪しい影が見付かったので結核予防会興生館に行き再検査を受けてください」と。

そういえば在職中でもその事は指摘されていた所である。気が付かない中に雇っていただろう肺結核が自然治癒した古い影ではと医師の診断だった。こんな訳で余り気にも掛けず過ごしていたが、嘗てはタバコ中毒だったので当然の因果として受け入れる外なかった。

【増え続ける肺がん】

疾病別の死亡原因は『がん』が第一位である。全体の約三分の一だと言う。続いて心臓病が第二位、脳卒中関連(寝たきり NNK)が第三位と続く。

此の『がん』の中では最近肺がんが急速に増加しているらしい。今や胃がんや大腸がんは診断と治療の目処が付いたが、肺がんだけは未だ厳しい段階に有ると言われている。胸郭内の臓器は特に重要な肺と心臓があり、肋骨で覆われ胸膜でも包まれて保護されているのだ。その上、生命活動の機能的なエンジン本体だから、絶えず不眠不休で規則正しく活動しているので手術が難しい。患者にとっても命がけの生死を分ける生命線である。従ってこの分野の高度な手術が出来る医師は神の手を持つ者として恐れられ尊敬されているのである。

また肺がんが増えていると言うのは、今までの統計では呼吸不全等の病名で処理されていたからでは無かるか！ここに医学の目が入り厳密に、是は肺がんと言う診断技術の進歩で統計区分上、増加したと思われる。事実医学書を開けば肺がんの分類は精密に整理と仕分けが進んでいる。何事も科学の発展はデータの整理と解析が

基本である。その意味では肺がんはなお研究の途上にあるような気がしてならない。

【一次精密検査】

求めにより指定日に昔の結核予防会に受診に行った。まずは胸部X線直接撮影が行われた。その写真を示して貴方は矢張り怪しい影があると指摘されて、その影が一ヶ月後に如何変化するかを比較したいと言う。1か月たって再度撮影したが良く分からないと言うので今度は6か月の間を空けて再々度検査を受けた。

今度はX線の直接撮影と新たにCTでも撮影され、荒井医師は前回と比較して影が大きく成っていると画像で説明してくれた。何でも知り合いの医師は面上上厳密な診断が要求される。知り合いも良し悪しだ。

その結果国立を紹介された。此の紹介状を持って11月26日呼吸器外科に行けと言ひ、X線とCTの画像は国立に回しておくと言った。そして肺がん確定診断の概略を説明した。ファイバースコープを気管枝から更に先の気管支枝にまで進め病変部位をかきとり検体としてがん細胞の有無を検査する。或いは肋骨の間から胸郭の中に穴を開けてファイバーで組織を取って生検すると細かく説明してくれた。話を聞くだけで奈落の底に突き落とされた気がした。

【知らぬが仏】

私は今までに肺臓の一部の病変肺葉を切除された患者を沢山見て来たが、今度は私の番だと慌てふためき煩悶した。こんな事なら初めから全然知らないで、『今日無事』それこそ知らぬが仏の方が何ぼでもままだと思った。何より検査は剣の山の難行苦行。よしや治ったとしても片肺。或いは検査途中の事故死。オベが成功しても5年生存率は何%か、それより今や私は平均寿命を全うした身である。延命効果の有意の差は幾らもない。仮に効果が有ったとしても半年か1年としたら、『心労病苦』のストレスは生きている限り絶え間無く付きまとうのだ。

【背中を押されて】

こうして国立に行くまでに悩んでいた時、行きつけの老人福祉センターの看護師さんに肺がんの予後について相談した。彼女は私の心情は分かるが、今は医学も進んでいるので医術を信じて行ってみたらと言う。考えてみたらセンターの看護師の立場ではそう答えるほか無かったであろう。また先般NHKチャリティー歌謡コンサートを見た。この時、歌手達はボランティア活動であるにも拘わらず熱唱に継ぐ熱唱だった。その時のキャスターの鳥越俊太郎さんが「私はがんを3回手術した。肺がんも切除した」と言う。「全国の肺がんの患者さん私が見本です。大いに希望を持って前向きに生きて行きましょう」と言うメッセージを出した。此の言葉は私には勿論の事、全国の悩める患者をどれ程勇気づけた事だろうか。

【知り得て妙・新たな希望】

国立で12月2日一泊二日で再度精密検査を受けた。CTガイド下生検である。胸水も検査された。さらに12月10

日再度検査と診察を受けて入院手術の必要は有りませんと開放された。万歳！今迄の暗雲が杞憂で有った事は何よりも幸いだった。願わくば彩雲の如く残余の人生が美しく輝く事を願う者である。それも現在の医療を信じ何事にも逃げないで前向きに取り組めば新たな希望が湧くものだ。今は皆様に感謝の気持ちで一杯です。

なお当院病友の肺がん治療の患者満足度は高かった。

儒教と仙台商法

仙台は伊達政宗を藩祖とする儒教ゆかりの地域である。儒教は為政者に有るべき姿を示したが、為政者に都合の良い服従の精神を礼義と言う立場から推し進めた。即ち奉仕の精神を勧める一方で、お世話になったら必ずそれに見合ったお礼をする事を不文律的に教えている。先般庭の改修で親身になって工事をしてくれた業者に、知り合いの庭の工事をしたいと言う友人を紹介した。

私の口利きが功を奏したのかは定かではないが、その業者から少なからぬキックバックの庭の補工を受けた。曰く「業務拡大には多額の宣伝費が要るが今回は貴方の口利きで纏まった仕事が出来ました。」今後も宜しくお願いしたいと言う訳だ。

省みれば此の手の謝礼は日常的に何処にも存在する商法である。効率が良いのだ。その分工事依頼者にオンされるのは伝統的な仙台での仕来りかも知れまい。

インフォームドコンセント

過日ある病院に大腸がんで検査入院した。大腸を空にして、なお2ℓの下剤を飲まされ洗浄しての内視鏡による検査である。

ところがその日の朝、私のベッドに配られた検査項目は座薬を入れて検査する計画であった。赤い字で検査変更が指示されていた。それで持参した看護師にどうして直前になって変更したのか説明を求めた。つまり医療に於いてインフォームドコンセント(説明と同意)の経過を求めた。しかしその看護師はその件に付いては全く当事者能力が無いので医師に相談すると言う。私は具体的な診療希望を検査項目を含めて申し渡した。

やがて私の検査項目は私の希望通りに復元した。ここに於いても医師との対話は全くなかった。かくして検査は異常なく進行して、入院治療する事はないとのことであった。

病院の医師は目が回るほど多忙である。ならば患者様と言うポーズは止めて、様は付けなくても良いからお互いに納得がいく開かれた診療をして欲しいとつくづく思った。

新時代の薬剤師

医師、歯科医師、獣医師に次いで薬剤師も6年制になり、既に第一回生は今4年生である。残る5年生と6年生の2年間で薬剤師としての実務研修も受けて国家試験

に臨むわけである。政府は高度に進展する医療技術の進歩に伍して行く為には『質の高い薬剤師が求められている。』としている。それに呼応するかのごとく、薬学部の偏差値が軒並みに医学部に継いで高いし競争倍率も高いのだが、相対的に現状はどうだろうか。

考えてみれば戦後最も進んだのが医学である。何故か。

- ① 医療に対する世間・国民のニーズがあった。
- ② 医学部・医師への教育投資に対して、社会的な高い評価と待遇を彼等は献身的努力で獲得した。さらに技術だけではなく情報発信型の物を言う政治的文化的な医師を数多く輩出した。しかも政界では医師議員は己の信念に基づき何党にも満遍なく広く分配されている。是は見上げた組織防衛だと評価したい。社会の仕組みがどう変わろうとも、議員の配置は何党にも按分されているので、職能勢力は保険に入った状態である。つまり要塞堅固な医師城は難攻不落であり逆に権力が擦り寄るのである。
- ③ 医師は世間のニーズに120%応えた。難病や高度の医療体制を拡充し、高貴な方の命も救った。

この点、薬剤師養成を6年制にする必要性について世論の追い風はそれほど強くはなかった。ある文部官僚は「薬剤師を養成するのには3年位でも良くはないか？」という者まで現れたと言う。事実世間では薬剤師を調剤薬局と言う【廓】で単に「処方箋通りに錠剤を数えて調剤（取り合わせ）し患者に薬の飲み方を説明して交付する者」とだけ位置付けている者が多い気がする。しかも服薬指導を積極的に受けたいと言うニーズもそれほど高くはない。そこに『質の高い薬剤師』と言っても、社会的地位と名誉と報酬をどこまで保障するかは今後の問題である。「脾肉の嘆」を味わえない業務の範囲と責任を適正に評価して頂ければ有りがたい。

アメリカやカナダでは、社会的に最も尊敬を集めている職業は第1位が薬剤師だと言う。それは薬剤師が患者のベッドサイドに行き、医師の薬の処方をチェックし抗がん剤のミキシングをし、医師と一緒に手術室に入って麻酔医と共に設備や薬のケアをし、医療の現場で欠かせない職種に成っているからだと言う。

新時代の薬剤師にとって重要な事はコミュニケーションスキルである。競争が激化する調剤薬局では、きちんと薬の説明責任を果たさないと患者から相手にされないだろう。また病院薬剤部の病棟薬剤師は診療部に於いて、患者治療のカンファレンスで薬の専門家として自信を持って、薬剤処方に意見や助言の出来る薬剤師でなければ無用の長物となるだろう。また在宅訪問薬剤師の仕事は、社会福祉や介護支援専門員制度にも精通し、適切に対応出来なければならないだろう。それから医師には認定医制度があるので、薬剤師もこの点を参考にして、がんの特化したがん認定薬剤師。抗生物質・感染症認定薬剤師。消化器系認定薬剤師。循環器、内分泌、神経系、または漢方薬剤師の分野もニッチ補完の意味で専門薬剤師としての存在を模索する余地がある。

こう考えると私は初めにベシミスチックな話をしたが、薬剤師の活動分野はまだまだ多くの未開拓の分野があります。それにしても薬剤師は【調剤の廓】から外に出て、己の殻から脱皮して医師や看護師その他に係わり積極的に情報発信すべきである。その為には政治力が大切である。此の意味では歯科医師連盟が自民党から外の政党に変更を検討中とか！薬剤師連盟としても与党でないとかの遠吠えだから、支持政党と支持候補を精査する段階に来ていると思われる。そう考えると私どもには、自民党の方も民主党の方も共産党の方も居られるだろうが我々は共に薬剤師党である。少数派は固まってこそ力である。

今度政権を執った鳩山総理だって工学部出身である。身近な所ではNHK会長に本学経済学部出身者がいる。まして薬剤師は6年制である。6年も掛けて難しい国家試験もクリアしなければならぬのだ。昔、薬剤師の最高地位は官僚（厚生省）では薬務局長だった。しかし、今では法文系のキャリアに城を明け渡し、医薬分業という果実を手に入れた。権力の分野に隙間はない。忽ち意志と能力のある方に埋め尽くされる。薬剤師官僚としてはその失地回復には多大の労力が求められよう。

一方、地方に於いても肥大化した官僚組織のコングロマリットの中で、県庁では薬務課長ただ一人が最高ポストである。市や出先の保健所では次長や医薬品食品係長である。新聞で異動欄を見れば数多の中、極く少数である。重箱で言えば隅の隅に追い遣られた感じである。

同じ化学を専攻した理学部や工学部では、専攻分野はもとより大学総長、大会社の社長や政治家、高級官僚にまで翼を広げている。新自由主義のサッチャーのように、首相にまで登り詰めたケミストまでいる。彼女は国の仕組みを変革し新時代を鉄腕で押し開いた。

私の尊敬する全国の薬剤師の先生方、多いにかつ目して大海の広さを知ろう。そして、薬剤師職能が政治家、医家、商家と共に世襲として次世代にも継承されて行くことを願う者である。しかし、現実では自分が薬剤師であることから転向したり、後継者に自分の子弟をしたがらない人もいる。薬剤師が持つ無限の総合的能力の割りに、女にはもてないし、是では元が取れない。

また給与の面からも検討してみたい。薬剤師の初任給は、一見高いがその後の昇給が低い。パソコンで見たとき、調剤薬局で薬剤師が4、5人の店舗の店長で、40半ばで年収は6～700万円である。是では息子を東京の大学にも出せない。同じくパソコンで見ると限り高級公務員の局長クラスでは年収2000万円。大会社の社長で4～5000万円。部課長では1500万円。また一般の40歳の一流企業の社員で1000万円と発表している。銀行の支店長で1500万円と言う。是では自分の息子を薬剤師にしたがらないのも、我々に課せられた蟻地獄の宿命かもしれない。【私大薬学部の林立】により今後薬剤師は過剰となり、就職難の時代が目の前に来ている。現にフランスやイタリアでは医師でさえ過剰で職がなく、タクシーの運転手

をしている者も多いとか！日本も他山の石と心得たい。

次は余談である。

在学中の55年前の帰郷中の汽車内での話で、対面に座ったお婆さんが角帽を着けた私に話しかけてきた。

「長大の学生さんですか？」

「ハイそうです。」

「何学部ですか？」

「薬学部です。」

「薬屋しなっとですか？」

「ハイそうです。」

と言ったがその後の会話は弾まなかった。

あれから56～7年たった今、パソコンで医療介護C B ニュースとココヤク薬学生薬剤師試験問題を毎日手掛けている。ピンポイント攻撃のミサイルとも言うべき新薬の薬理と生理に追われている。或る時、医療福祉には無関係のある会合で、隣りに居合わせた初対面の老人に自己紹介がてらに開口一番

「……………」

「*****。」

「製薬会社に勤めていました。」

「あそう！薬屋さん。」

と言うので話はそれで途切れた。

ざっと薬剤師の社会的な評価と位置付け関心は、5～60年前と大差はないと悟った次第である。『疾風知勁草』

実にローマは一日では成らずである。「長く続けば本物になる。本物は長く続く。」長崎の薬学部は私の人生の原点。どんな時も薬学部と共にあった。たった4年、されど4年である。優秀な先生と竹馬の学友。私は山より高く海より深い恩義を受けた母校に何を恩返し出来たか、何を恩送りしたいのか！

「集り散じて人は替われど仰ぐは同じき柏葉の理想」
薬剤師6年制を契機に『お医者様には及びもないがせめてなりたや認定薬剤師。』（アメリカナダ）

三朋会(昭和30年卒)だより

郷野美智子(昭30)

第22回三朋会は、秋たけなわの10月14日(水)～16日(金)まで、肥後の国、54万石の城下町熊本で開催しました。昨年は、甲斐の国(山梨県)で、日本一の富士山(五合目)まで登り、河口湖からその美しい山容を堪能しました。今年はクラスメートと共に世界一の雄大なカルデラ火山に登って、「迫力ある火口を見ることが出来れば」との思いと同時に、昨年復元新装成った「天下の名城熊本城を訪れることが出来れば」との思いで企画しました。

私たちが初めて出会った(昭和26年入学)時から早くも58年半が経ちました。卒業時42名居た仲間も今では30名となりました。現在、病床にある方、介護に頑張っている方も居られて、総勢13名で集うことが出来ました。

第1日目は、水前寺成趣園の近くの水前寺共済会館に宿泊したので、会が始まる前に、桃山様式の優美な庭園

を巡り、趣ある風情、阿蘇の伏流、清冽な湧水に心洗われる感動を覚えました。懇親会では先ず幹事の山本さんが他界された12名のお名前を一人ずつ呼び上げ、在りし日のお姿を偲びながら全員で黙禱を捧げました。熊本名物の美味しい郷土料理を頂きながら旧交を温め、各自の現状を話しました。

お開き後は、一室に集まってそれぞれに楽しい時を過ごしました。また、昨年世界一周の航海をされた森田さんの千枚を超す写真を見ながらのお土産話は興味深く、時の経つのも忘れる程の楽しい時間を過ごしました。

2日目は貸切観光バスで先ず「阿蘇猿まわし劇場」を訪れ、2匹のお猿さんの礼儀正しさ、姿勢の美しさ、そして勿論芸の素晴らしさに皆笑顔と拍手の連続でした。帰りには握手で見送ってくれました。

次は阿蘇山火口見学の予定でしたが、お山はその日時



で規制がかかり登山不可能の事も多いそうで、その時も登山禁止の規制中で、仕方無く予定を変更して昼食をとり、ファームランドに寄り、草千里を散策して阿蘇火山博物館、オルゴール響和国を見学したところで、突然お山のご機嫌が直り、規制が解除されて大急ぎでロープウェーで登山出来ることになり、メンバーの殆んどが数十年ぶりの火口見学で大はしゃぎで喜び合いました。火口は、鮮やかなエメラルドグリーンの湯だまりと凄い火山灰が空高く噴出していて、ガイドさんの説明を聞きながら世界有数の火口に暫し見とれてしまいました。

ロープウェーで下山した時は、又登山禁止の規制がかかっていたので、ほんの僅かの時間、お山は遠来の私たちを招待して下さったと感謝しました。夕方、温泉で有名な内牧のホテル角萬に宿泊しましたが、お部屋から涅槃の姿と称される美しい阿蘇五岳を目前に眺められ、火口から遠景まで阿蘇を満喫することが出来ました。温泉を楽しみ、懇親会後は又一室に集い遅くまで語り合いま

した。

最終日はバスで熊本市に直行して、加藤清正公が築城された日本三大名城の一つといわれる熊本城（約150年前に焼失したが、天守閣は昭和35年に、本丸御殿は昨年復元された）を見学し、聞きしに勝る立派で豪華なお城は言葉では言い表せない素晴らしさでした。その後郷土料理の昼食を頂き、散会してそれぞれ帰路に着きました。

60年に近い昔からの旧友と心おきなく歓談できるのは何にも増して有難く嬉しい限りです。来年は関西の皆様にお世話して頂くことになりました。どうぞ宜しくお願い致します。

皆様呉々もお元気で!! 再会を楽しみにしています。

出席者（敬称略）

山戸 寿、馬詰久子、川上萬里、黒岩幸雄、同夫人、小島 弘、宮崎タツ子、酒井裕子、峯 武磨、峯 京子、森田和之、山本 勲、郷野美智子 以上13名



平成21年10月14日 於 水前寺共済会館グレース

年に一度のクラス会

真海 延子（昭31）

私共4回生は毎年5月のクラス会を大変楽しみにいたしております。平成21年は福岡地区の担当で、女性3人が集まり、右往左往しながらお世話をさせて頂きました。

出席者24名のうち13名は今も現役のため、土、日（5月23日、24日）の日程に致しました。宿泊は一部から福岡ドーム横のシーホークホテルとの希望があり、翌日は“西鉄旅行”のパフレットにあった博多湾ランチクルーズを選びました。

今回一番の特筆すべき点は、パーキンソン病の松尾明美さんの参加があった事です。幸いだったのは、優秀なヘルパーさんの付き添いがあった事、バリアフリーの部屋がとれた事、彼女が一番楽しみにしていたカラオケルームの予約にホテル側がよく対応してくれた事などです。カラオケルームでは松尾さんもたっぷり歌う事が出来、最後に森さんと青木さんの素晴らしいデュエットでしめくくる事が出来ました。

ホテルの料理も「質を落とさず、量は少な目に」など

希望を叶えてくれ、満足でした。翌日の福岡タワーからの眺望も素晴らしく、又博多湾クルーズでも海の風を満喫しながらのフランス料理は絶品でした。

下船後解散。うち12名はオプションの旅で西へ向かいました。歴史ある糸島の干如寺^{せんによし}、唐津ベゴニアガーデン、

唐津名物いか活造りを堪能し、3日目は唐津城および周辺の史跡を巡り、午後博多駅に戻って解散となりました。

来年は松江です。それを楽しみにまた1年間仕事と健康維持に頑張ります。



平成21年5月24日 於 ペイサイドプレイス

昭和32年卒クラス会と一番ヶ瀬 尚先生

白石 葉子（昭32）

10月18日、熊本市に一番ヶ瀬先生ご夫妻を夫・哲也と共に訪ねました。翌19日は先生の93歳の誕生日、加えて今年はダイヤモンド婚をお迎えになられたとのことで、一緒にお祝いをさせていただきました。



奥様の、食事をはじめ日常の心配りのもとで先生は読書にいそまれ元気に過ごされています。奥様は現在も七宝作家として活躍されています。

平成19年10月、長崎在住の方の尽力により、丸山の花月で卒業50周年記念の会に先生ご夫妻をお迎えして盛大に開くことができました。卒業時に45名だった同期生も10名の方が亡くなり、参加者は同期生17名でした。平成20年10月に由布院、彩岳館でのクラス会では、本人や家族の健康上の理由で参加できない方が増えてきたので、全員に呼びかけてのクラス会はこれを最後にしようということになりました。

さて、先生がクラス会に参加して下さるきっかけは学生時代にさかのぼります。昭和28年に入学した私たちは2年生の専門課程から昭和町校舎で学びました。我々の学年主任となられたのが当時、生化学講座の教授であった一番ヶ瀬先生でした。昭和38年から熊本大学薬学部に移られても、今年75歳を迎える私たちとの交流はずっと続いています。私たちの会話では親しみを込めて番先生とか番さんと呼んでいます。

クラス会の初回が何時だったか、その後何回、クラス会を開いたか、手元にある写真から推測しますと、30代から50代は5年おきくらい、還暦を迎える頃から2年おきに、その後毎年、各地に散らばる同期生が幹事となり、

クラス会を続けてきました。勿論、長崎に集まることが多かったのですが、東京、箱根、下田、京都、神戸、尾道、山口、北九州、博多、別府、由布院などに集いました。ここ20年くらいは欠かさず先生は参加して下さい、最近のご夫妻で出席して下さいました。

ある時、先生は「多くの卒業生を送り出したが、こん

なに長く続いて参加しているクラス会はないよ」と言われたことがありました。出来の悪い気がかりな学生が多かったのかもしれませんが。

元気な一番ヶ瀬先生にお会いすると、「もう年だから」と言ういい訳は止めて、しっかり生きてゆこうと言う気持ちになります。

祝賀会に出席された皆様へのお礼

下村 明美(昭34)

3月22日長崎での下村のノーベル賞受賞祝賀会には、沢山の方々がご出席下さり有難うございました。当日は遠く北海道からまで来て頂いた方々もありましたのに、会場が混雑していて同窓の皆様にご挨拶どころか、お顔も見ず一言もお話出来なかった方々が沢山おられましたことを、後日これも皆様からお送り頂いた写真で知って、大変残念で申し訳なく思っております。あの方もこの方もお越し頂いていたのだと知って、せっかくの機会でしたのにお話する機会を逸したことを主人共々とても悔やしく思っております。失礼してしまった皆様には本当に申し訳ございませんでした。深くお詫び申し上げ、お礼を述べさせていただきます。

早一年が過ぎ、その間世界中からいろいろな招待や講演依頼を受けて、今なおその対応に追われる日々ですが、

同窓や薬学関係諸氏の喜ばれたお顔を思い浮かべては元気を出して頑張る毎日です。

美しいアルバムを作ってお届け下さった昭和32卒の河田和子様、昭和36卒の黒田 誠様、そして昭和26卒の方々から頂きました沢山の写真は、当日を懐かしく思い起こして、いつまでも良い記念になると嬉しく思っております。これ等のご親切にも厚くお礼を申し上げます。殆んどの方々が薬学部で私の先輩であられる方々でしたが、お健やかな姿を写真でも拝見出来まして若輩の私も勇気づけられました。

皆様方がこれからもずっとお元気でご活躍されますようお祈り致します。またお会いする機会がありますように願っております。

三葉会(S34年卒)卒後50周年を迎えて

富安 一夫(昭34)

今年平成21年は私達にとって卒業してから50年目にあたる。毎年各地で開催しているクラス会(三葉会)ではあるが、今年は卒後50周年の記念すべき会として母校がある長崎で行うことになり、幹事は長崎在住の松尾幸子さんを中心に松尾昌代さんの協力で企画・実施された。参加者は21名(男9、女12)で平成21年10月11日午後長崎駅に集合することから会はスタートした。

まず、バスで通過したのが「女神大橋」である。長崎港口をまたぐ長さが1,289mの巨大な橋(九州最大の斜張橋)で4年前の平成17年12月に開通したものだという。4車線の立派な橋でここから眺める長崎の町はまさに絶景であった。卒後50年の時間を実感した瞬間であった。

宿泊は野母町にある「野母崎海の健康村」である。私には野母崎は初めての地であったが、野母半島の先端に近づくにつれてバスの窓に東シナ海の見晴らしが広がり歓声があがった。好天に恵まれ端島(軍艦島)も間近に見られ歴史が感じられた。宴会はイセエビ料理が中心でなかなか豪華なものだった。宴会後、別室にて夜が更け

るまで歓談が続いたが、趣味、病気、年金、介護、連れ合いとの別れなど、歳相応の話題が続いた。しかし、最も時間を取ったのが下村先生の夫人が同級生の下村明美さんであることから、ノーベル賞受賞後の先生夫妻の長崎とのかかわりの話題であったと思う。地元が熱心に応援してくれている様子は聞いていて嬉しい。

翌12日は前日同様ホテルのバスで移動した。最初に立ち寄ったのが近くにある「長崎県亜熱帯植物園」である。南国ムードに満ちた珍しい植物園でしたが、時間の制約があり、名物のトレインバスで足早に見るだけだった。ただ園の特色を職員から聞いたが、大温室やフラワーガーデンなど見ごたえがあり、シーズンには時間をかけて再度訪れたい所だった。

それから一路母校である薬学部に向かった。文教町の校舎訪問は初めての人もかなりいて、50周年記念行事としてこの訪問は特に意義深いものだった。あいにく12日は祭日(体育の日)だったが、同窓会事務局の武次さんに出動していただいた。思い出に残る訪問になったのは

彼女のおかげと感謝している。ここでは、先ず、長薬同窓会館内にある「下村 脩名誉博士顕彰記念館」を訪れた。先生の業績が展示物等で分かりやすく展示され、しかも資料的にも立派で先夜の話題が大げさでないことを体感できた。ノーベル賞の偉大さを改めて感じさせられた見学だった。その後、耐震工事でリニューアルした校舎に入り、休日なので全体は見られなかったが、一部分だけでも現代の学び舎が偲ばれ、我々の時代との格差を感じさせた。その帰りにバスは住吉から昭和町に通じる道路を走った。50年前とは全く見違えるような町並みに

息を呑んだが、元の校舎の前を通過した際、道路から校舎玄関までの距離が記憶より短く、印象がずいぶん異なって見えた。やはり思い出の中の学校が一番だと感じた旅だった。

最後は昼食である。長崎といえば中華料理が頭に浮かぶが、今度の記念クラス会では幹事が卓袱料理を選んでくれた。鍛冶屋町の「長崎卓袱料理浜勝」である。昼食なのでお手軽な卓袱ではあったが、長崎郷土料理の卓袱を味わうことでまた長崎の思い出が増えたように思う。午後2時頃、お互いに再会を誓ってここで解散した。



小林五郎先生を偲ぶ会

白松 一良 (昭36)

今年6月、東京で長薬同窓会定期総会が開催されるに当たり、暫く中断されていた小林五郎先生(薬化学)を偲ぶ会を催すことになりました。小林百合子夫人の体調を考慮し、横浜界限ならば出席が可能という事で、中華街・華正楼にて奥様のお元気な姿をお迎えすることが出来ました。遠くはアメリカから呉 欽敬先生(昭40)をはじめ各地から総勢54名の参加が得られました。

思えば、昨年長崎での長薬同窓会総会時、富永義則先生(昭44)らとまた「偲ぶ会」をやりましょう!と意気投合し、丁度東京での総会開催に合わせて行えば良いタイミングであろうと言う事になりました。また、今年2月8日、福岡で行われた古川 淳先生(昭25)の瑞宝中綬章の受章祝賀会でも、この話題で一段と盛り上がりました。古川先生からも、薬化学教室の歴史を話す良い機会だと賛同を得ました。

加えて、昨年のビッグニュース、我が同窓会にとりまして最大の名誉である下村 脩先生のノーベル化学賞受賞という快挙はご承知の通りであります。その下村先生ご結婚の際、ご媒酌人を務められたのが小林五郎先生ご夫妻であったということで、これは正に「再開の時来り」であります。

その後、関東支部幹事長の樋口宗司先生(昭42)や関東在住の同門の皆さんと相談し、黒岩幸雄先生(昭30)に代表世話人をお引き受け頂き、多くの方々のご支援を得て「偲ぶ会」開催の運びとなりました。

当日6月20日(土)、横浜は開港150周年で賑わっておりました。五郎先生も近くでご覧になっておられたことでしょう。先ずは、古川先生が「薬化を築立った同窓生」と題してご講演をなされました。当時の沢山の写真を学年別にご披露され、一同タイムスリップし、往時の話題

で大いに盛り上がりました。続いて、古川先生の研究テーマや下村先生との関わりをスライドにて解説されました。

全員の記念撮影を先に済ませ、いよいよ黒岩先生の開会のご挨拶、森田和之先生（昭30）の献杯で偲ぶ会が始まりました。これまでは関東地区での開催でしたが、今回は初めて全国の薬化学出身者や関係者に声をかけ、多数の参加者が集いました。懇親会は卒年別にマイクを回し、五郎先生の厳しさと暖かさに溢れた薫陶の思い出話や、ご自宅でご馳走になったり、時津湾でのキス釣りなど数々の行事で百合子夫人にも大変お世話になったことなど話は尽きませんでした。また、富永先生の「ケミルミネッセンスの実験」でGFPの蛍光に感動し、下村先生の偉業に改めて敬意を表しました。

最後に、百合子夫人から謝辞が述べられました。若々しく、お元気なお姿に全員が感激し、今後も参集のチャンスを考えようとの声が上がりました。

偲ぶ会は約2時間半でお開きとなり、一行は東京・アルカディア市ヶ谷の長葉同窓会総会へ急ぎ参加しました。

後日、百合子夫人も多くの方々とお話ができ大変喜んでおられるとお話を聞き、誠に嬉しい限りであります。更に、沢山の方々から「楽しく充実した会でした」との声をお聞きしました。これもひとえに参加された皆様のご協力と共に、黒岩幸雄先生はじめ発起人の方々のご尽力の賜物と感謝申し上げます。

何時の日か楽しい再会が実現しますよう、祈念申し上げます。



平成21年6月20日 於 華正楼（横浜中華街）

36ばってん会クラス会報告

粟屋 順子（昭36）

36ばってん会はずいぶん皆70の坂を越えた。しかし元気なのである。そして仲が良い。仲が良いから一年に二回も会うなどということが起こる。元気といっても皆それぞれ問題を抱えているのは当然である。命の危うさも一度や二度は体験しその上でなるべく沢山会っておきたいと思う。一期一会なのである。明るくて尽きないおしゃべりと笑いの中に会って別れる。

という訳でその一回目は6月20、21日。20日は東京での長葉同窓会定期総会当日でこれのみ出席の「マジメ派」、及び「皆に会いたい派」とそれぞれの理由で総会には5名、ミニクラス会に10名となかなかの出席ぶりであった。「日立目白クラブ」での昼食を楽しみ（おつにすましたウェ이터から日立に関係のない方はご入館頂けませんと釘をさされたというおまけ付き）、雨の中を雷門でスナップ写真を撮り、隅田川下りと浜離宮散策でちょっぴ

り江戸の情緒を味わい、昔に帰ってはしゃぎ楽しみ、再会を約して帰途についた。



平成21年6月21日 於 日立目白クラブ

そして二回目は11月14, 15日。佐賀唐津での再会となった。なんと21名も集まったのである。やはり仲が良くて元気なのだ。唐津シーサイドホテルは虹の松原を背に玄界灘を両手に抱える素晴らしい所であった。潮騒を聴きながら温泉で疲れを癒し楽しい宴会となった。それぞれの近況を報告し、いたわり慰めあい、カラオケは勿論ナツメロ、酒量もそこそこ減り、ほっと心和むひとときであった。最後には校歌を斉唱。皆、ちゃんと覚えていた。翌日は市内観光。鏡山から虹の松原を一望し、景観に眼を奪われた。かつての炭坑王が残した旧高取邸は、明治から昭和にかけての建築の粋をこらした和に洋を巧

みに取り入れた建物で、現在は市の迎賓館として使われているそうである。筆者の私はここで別れることになりこのあとの楽しさをご報告出来ないのが残念であるが、曳山展示場、中里太郎右衛門陶房が予定されていたことを付記しておく。お気に入りの茶碗など求めた人もいたかどうか.....

さて、この記事を読んで次回は是非参加したいと思って頂いた同級生がいたら筆者冥利につきるというものである。再来年卒後50周年を迎える。来年の大分及び、長崎での再会を祈念している。



平成21年11月14日 於 唐津シーサイドホテル
黒田, 穴井, 武田, 自見, 廣島
永田, 高木, 林田, 白松, 藤島, 園田, 有吉
伊藤, 粟屋, 越中, 松林, 檜崎, 光武, 吉川

昭和37年卒同期会

福島 祐作 (昭37)

今年の同期会は平成21年10月18日(日)～19日(月)にかけて、玄界灘に面したシーサイドエリア唐津・呼子方面の観光と万葉の海、松原潟に面する虹の松原の直中、雄大な展望を誇る唐津シーサイドホテル宿泊で行いました。大学卒業後47年余経過していますが総勢21名、遠くは関東、東海、関西等から参加いただきました。当時は定員40名でしたので約5割の出席率でそれぞれ進んだ道は違っていました。約半世紀過ぎても相互連携の良さ、仲の良さでは他学年に引けを取らないと自負しております。参加者(敬称略)は女性：岩永, 寺尾, 中山, 山口, 男性：荒木, 池田, 小野, 香田, 坂田, 瀬崎, 高井, 渡久地, 中西, 野内, 野村, 早崎, 林, 馬場, 福島, 松田, 吉田の各氏でした。

幸いにも両日とも好天に恵まれ風は穏やかで唐津城か

ら見おろす紺碧の海と海浜に続く虹の松原の美しさはたとえようもないほどでした。虹の松原は、三保の松原、気比の松原とともに日本三大松原のひとつに数えられる景勝地で長さ約5km、幅約1kmにわたり、約100万本のクロマツが群生しているとのこと。また、初日唐津焼窯元を見学しました。唐津焼は楽焼、萩焼と並ぶ日本三大茶陶器の一つと言われ、花や草木を文様とした絵唐津や重厚感のある朝鮮唐津や斑唐津など温もりのある器で品格があり、心ひかれるものがありました。

夕食会は遠くさいたま市より駆けつけてくれた中西洋吾兄の乾杯の音頭を皮切りに、イカの活き造りやイカしゅうまいをはじめとした海の幸や黒毛和牛のステーキ等に舌鼓を打ちながらお互いに話の尽きないひと時を過ごしました。余談になりますが唐津・呼子の烏賊(いか)

の活き造りは透き通っていて歯ごたえは良いが咬む時に抵抗感がない!! 他所ではあまり味わえない食材と思いました。

このイカは当地ではヤリイカと呼ばれていますが標準和名はケンサキイカとのことです。ヒレが菱形で角ばっています。イカはこれまでコレステロールが多く含まれていることから懸念されることがありましたが、最近の研究では血中のコレステロールを抑制するタウリン・EPA(エイコサペンタエン酸)・DHA(ドコサヘキサエン酸)も多く含まれており、コレステロールを上げない食材として見直されているそうです。またイカのタンパクは非常に良質で、低脂肪な為、ダイエット食材として

向いているそうです。以上余談ですがあまりにも美味ゆえに調べてみました。

さて、19日は朝一番に呼子朝市を訪れました。獲れたての魚介や野菜が所狭しと並べられ新鮮さと素朴さに感じ入った次第です。ここで各自それぞれ思いを込めて土産物を求めました。そのあと今から400年程前、全国平定を成し遂げた豊臣秀吉がさらに朝鮮半島、明国(今の中国)へ向けて出兵するため、その前進根拠地として築かせた名護屋城跡や玄界灘の荒波にさらされて出来た七つの洞窟が並んでいる七ツ釜を見学し、昼食をとったのち来年の再会を確認して解散しました。とても有意義な2日間でした。



平成21年10月18日 於 唐津シーサイドホテル

新型インフルエンザ

松村 祐子(昭40)

孫が新型インフルエンザで休んでいるという電話があった。娘は1週間程自宅待機、娘婿はマスクをして勤務だそうだ。

小学校の養護の先生から、アルコールラビング(のようなもの)を給食用の予算の中から用意してもらったけど、もう予算がないので、もっと安いものはないかと相談を受けた。

たまたま地区の図書館に次亜塩素酸ソーダの溶液(2~3ppm, 11月15日まで有効)が用意されているのを見かけたので、より安く、より手軽で、より安全なものを調べて報告することを約束した。行く先々で、なんの気もなくバカバカ使用していたので、それにお金がかかっているということには気づけなかった。私は必ず石けんで手を洗い、水でうがいしているが、寒くなると続くかなあという気もある。手も荒れるし...

調べてみて、まずウィルスに効果があるもので、子供

に使用できるのは、次亜塩素酸ソーダ、消毒用エタノール、70%エタノール加塩化ベンザルコニウム(市販のパカパカ使っているもの)イソプロパノール、ヨウ素液、希ヨードチンキである。このうち、ヨウ素液、希ヨードチンキは薄めて設置できるか疑問に思った。だが、いくら割安でも20kgの容量は、養護教諭が調整するには無理。あまり重くない、扱いやすい容量、その結果、本社の薬剤師と相談して、イソプロパノール50%、18ℓで7000円位、次亜塩素酸ソーダ12%は5kgで1000円以下位、400倍に薄める。6%500g、200倍に薄めるがお勧めということになった。イソプロパノール50%、18ℓは、学生の時、石油ストーブのポンプで小分けしていたという本社の先生の話でそう進言した。

新型インフルエンザはもう豚まで罹患(大阪)して、いつ終わるともわからない。孫や子供には、栄養をとり、規則正しい生活をし、かかっても早く、軽く回復する体

力をつけるよう、 unnecessaryな集会には参加せぬよう、いい聞かせている。長い辛抱の時間である。

私の生まれた昭和16年頃の時代もこうだったのかなあと思う。

ただわざわざワクチンを打つことだけど、一度かかったら、再度かからないのか？また看病した者や、新型インフルエンザにさらされている医療関係者には自然に免疫が着かないのだろうか？

ちなみに、二女に夜電話すると、一時間経っても誰も出ない。インフルエンザで診察にでも行ったのかと思いい、携帯にかけたがつながらない。長い？時間のあと、コンセントがよくはまってなくてつながらなかったが、みな元気だということがわかった。次の日、学校に電話すると、イソプロパノール50%、18ℓを購入するよう、校長と考えているとのことだったが、それを購入するのも局方品であるので、校医に尽力願わないといけない。

古川 淳名誉教授の瑞宝中綬章受章祝賀会

長薬同窓会会長 伊豫屋 偉夫（昭41）

長崎大学薬学部教授、長崎大学薬学部長、長薬同窓会長を勤められた古川 淳長崎大学名誉教授が平成20年秋の叙勲で瑞宝中綬章を受章されました。

古川名誉教授は、昭和25年に長崎大学薬学部の前身の長崎医科大学附属薬学専門部をご卒業後、昭和30年10月から長崎大学薬学部の薬化学の助手、昭和35年5月から薬化学の助教授、昭和45年4月から薬品合成化学の教授を務められ、研究と教育に邁進され、多くの優秀な学生を世に送り出され、平成5年3月退官されました。

また、昭和55年4月から昭和59年4月まで長崎大学薬学部長を、昭和63年度から平成3年度までと、平成6年度から平成7年度までの2回にわたり長薬同窓会会長を、また薬学部の野球部顧問も務められ、薬学部並びに長薬同窓会の発展のため多大な貢献をされました。

そこで、古川名誉教授の叙勲受章をお祝いし、今後なお一層のご健康とご活躍を祈念するため、薬学部で先生と関係の深い長薬同窓会、長薬同窓会福岡支部浦陵会、薬品合成化学同門会、薬化学同門会、野球部同窓会の5団体が発起人となり、祝賀会を平成21年2月8日(日)に福岡市のホテルセントラザ博多で開催しました。

当日は天気にも恵まれ、関東、近畿、山陰、山陽、九州の各県から150名の同窓生が博多に集まり、先生ご夫妻を囲み歓談し楽しい一時を過ごすことが出来ました。

畑山 範薬学部長にもご足労いただき、ご祝辞を賜り

ました。また、薬品合成化学同門会の篠原亮太代表（昭46）から記念品として、永年内助の功に務めて来られた奥様に、現在福岡県久留米市にお住まいですので、「久留米餅」をプレゼントしてあげてくださいと、目録の贈呈が行われました。もし不足する時は先生が手出ししてくださいと付け加えさせていただきました。その後、古川名誉教授から特別講演をしていただきましたが、出席者はいつの間にか学生時代にタイムスリップして、真剣に先生の講義に耳を傾けていました。

講演が終わり現実に戻って、西脇金一郎野球部同窓会長（昭33）から祝宴開会の挨拶を賜り、薬品合成化学同門の大坪美穂さん（昭47）の祝舞で盛り上げていただき、古川名誉教授の同期生で昭和25年卒の岸川 良さんの乾杯の音頭で祝宴が始まりました。祝宴では、同門生が各学年ごとにご夫妻を囲み写真を撮り、学生時代の思い出話に花を咲かせ、舞台上って各自近況報告をし、歌い踊りと賑やかな時間を過ごしました。あっと言う間に時間が過ぎ、まだまだ話し足りない状況でしたが、時間に限りがあり、現在古川名誉教授が所属しておられる長薬同窓会福岡支部浦陵会の青木 郁会長（昭38）の音頭で万歳三唱をして祝賀会を閉会しました。

最後に、ホテルとの打ち合わせ等、細部にわたりご尽力をいただきました青木 郁福岡支部浦陵会長に厚くお礼申し上げます。



修善寺旅行によせて

井田 節子(昭41)

私たち昭和41年卒業生は、このところ毎年大阪、ハウステンボス、高野山、日光、壱岐などへのクラス旅行を企画しクラス会は大いに盛り上がっています。今年は同級生の伊豫屋同窓会長のもとに東京で開催される平成21年度長薬同窓会定期総会の日程に合わせて、6月20日から22日まで二泊三日で東京および修善寺へ観光旅行に行ってきました。クラス会は遠く宮古島、沖縄、長崎、広島、栃木などから計21名が参加するという盛況ぶりでした。幹事をつとめてくださった中村政記さんの号令一家、東京近郊に在住する同級生は3回の準備会を打ち上げ会に集まりました。会食をしたあとには上野博物館で開催されていた“熱帯感染症とたたかう長崎大学”企画展や、小石川植物園の薬草園の見学などにも誘っていただき旅行を機に大いに親交を温めることができました。準備会は、ちゃめっけな黒田諒美さん、おっとりした小篠さん等々みんな卒業後40年以上経っても学生時代と変わらないそれぞれの個性を大いに発揮し、笑いの絶えないとても愉快的なものでした。賑やか過ぎてついには中村さんが恐縮してお店の人に詫言するという一幕もありました。中村さんご苦労さまでした。

クラス旅行の第一日はまず長薬同窓会定期総会と懇親会に出席しました。先輩後輩が一堂に会すると往時の薬学部雰囲気の方がより強くかもし出されるようで、アニリンやピニジン、メルカプトエタノールなど一度嗅いだら忘れられない臭気に満ちたあのなつかしい薬学部昭和町旧キャンパスでの学生生活が思い出されたひと時でした。あちらでもこちらでも“お久しぶりです”という言

葉が飛び交っていました。総会もいいものですね。懇親会の後は地上202メートルの東京都庁45階から東京の夜景を楽しみ第一日目の日程を終えました。

第二日目は、誰かわからないけれど強烈な雨男か雨女のせいで土砂降りの雨にみまわれてしまいました。そんな雨の中でも借り切ったマイクロバスの中は快晴で、各地から持参してくださった土産物なども配られ、お上りさんよろしく皇居、靖国神社、東京タワーなどを見物しました。が、ズボンなどとはにかく雨水がしたたるほどずぶ濡れで、あまりの事に終りには大笑いになってしまいました。大雨もみんなで濡れれば楽しくなる事を発見した次第です。午後は修善寺へ移動し新緑の中を源氏滅亡の史跡をそぞろ歩いて往時に思いを馳せました。宿は明治5年に創業され登録文化財になっている古色豊かな新井旅館で、芥川龍之介など多くの文化人に愛された由緒あるところでした。ラッキーにも芥川龍之介が愛用した優雅な室に割り振られた友人の部屋を皆で入れ替わり訪れ、“やっぱり芥川が愛用していた部屋は我々の部屋とは大いに異なる、これで同じ料金はずるい。”などと冗談にやっかんでみたり、またまた屈託なく盛り上がった事でした。夜はちらほらと蛍もみえ、新しく制度化された登録販売者制度の事なども話題に上げつつ夜は更けてゆきました。

第三日目は大いに土産物を買いきみ、ボランティアガイドさんの案内で源 頼朝、北条政子ゆかりの史跡と、葦山反射炉・江川邸などを見物しました。“楽しかったね。来年は同窓会定期総会のある佐賀、長崎で会いましょ



う。”を合言葉に再会を約してそれぞれの帰途につきました。

振り返って数えてみると今までに実に80%以上の同級生はどこかのクラス旅行に参加していることになりました。しかも“おいら学生時代はこんげん仲ば良かったとか

なー？”と感嘆の言葉が出るほど学生時代以上に屈託がなく和気あいあいとした旅となるのが常となっています。これからも元気で楽しい時間を分かちあってゆきましようね。

“お～～い。会いたいよ～～！ みんな集まろう～～。”

1967年卒同期会報告

藤本 正治（昭42）

同期の皆様お元気でしょうか。2009年6月20日東京での長薬同窓会定期総会にあわせて、懇親会終了後19時より総会会場の直ぐ隣の炉辺焼きの店で同期会を開きました。出席者は赤神さん、河瀬さん、杉さん、渡辺さん、大塚君、梶野君、竹尾君、谷君、樋口君、渡辺君、そして藤本の11名です。渡辺さんと梶野君が関西から、竹尾君が福岡からの参加で、残りの8名は関東在住者です。関東在住でも8人が集まったのは初めての事であります。全員にスピーチをお願いして、一人ひとり積もる話をして頂きましたが、誰の話も興味深く、3時間近くがアツという間に過ぎてしまいました。席を立つときになって思い出し、記念の写真を撮ったのですが、奥様との約束で明日箱根へ行く竹尾君は、一足先に出た為この写真に入ることができませんでした。

あくる日は午前10時に新丸ビルの1階で待ち合わせをして、皇居周辺の散歩と昼食会を計画していたのですが、あいにくの雨で散歩は中止、直ぐ近くの大きな丸善本屋と喫茶で時間を過ごして、11時30分に予約していた新丸ビル35階の見晴らしの良いイタリアンレストランへ行き、同期会二次会をもちました。出席者は河瀬さん、杉さん、渡辺さん、梶野君、谷君、樋口君、渡辺君、藤本の8名です。少し蒸し暑い日でしたので、勤めてくれたスパークリングワインで乾杯して、フルコースの食事と尽きない話で楽しい時間を過ごすことができました。

今回の同期会は同窓会の要請があり急きょ開いたこと、皆さんの居住分布からすると東京は北東の端で遠いこと、また、新型インフルエンザの影響もあって、いつもより出席者の数が少なかったことが残念でした。住所が書かれた同窓会名簿全員（38名）に案内状を出しましたが、Eメールによる連絡が14名、手紙やハガキを戴いたのが6名、電話による連絡が5名でした。残る13名の方とは連絡がとれませんでした。

来年は井上君が久しぶりに長崎で同期会を開くといっていますので、是非長崎で沢山の方とお会いしたいと楽しみにしています。井上君によると長崎の街もこの20年で大きく変わったそうで案内したいといっていました。

最後に長薬関東支部会との関連ですが、私が支部年会に出席するようになったのは、3年程前に樋口君から、今度谷君が支部長に就くので出てこいと連絡があつてからです。樋口君はその前から支部の世話をされていて、講演会、同窓会誌、支部年会、ゴルフ同窓会、そして今年は東京上野での長崎大学全学部同窓会と多くの仕事をされています。ボランティア精神が欠落した私からみて樋口君は偉いといいたいです。一番有難いのはゴルフ同好会を企画してくれることで、毎年8人程度ですが先輩後輩と一緒に楽しく遊んでいます。今年は春に樋口君、渡辺君、奥野君（昭47）と私の4人で習志野CCでプライベートの会を持つことができました。定年退職して早5年、元々スローな私は益々スローな生活を愉しんでいます。来年は長崎で井上君とゴルフができそうで楽しみです。では、皆様お身体を大切に、久しぶりの長崎でお会いしましょう。



S44年卒の同窓生大山・米子に集う

富永 義則（昭44）

もう何回目の同窓会になるだろうか、記録を見ないと思い出せないほど回を重ねてきた。今回は米子に居る松村秀生が幹事を引き受け、盛大に同窓会が開かれた。前回佐賀県嬉野での同窓会で、それとなく北海道旭川市の旭川動物園を訪ねる同窓会にしようかという案もあったが、積極的な盛り上がりも無く、そのままになっていた。それが大阪の長楽同窓会定期総会に合わせてミニ同窓会を開いた席で、もう一回松村にお願いして山陰地方、米子での開催はどうだろう、ということになり今回の開催になった。中国地方ということであれば、やはり大山国立公園だろう。昨年暮れに連絡し、快く引き受けてもらって今回の同窓会になった。

やはり大山は遠い。この日、10月31日(土)は数日前からの天気予報が気に懸かり、車で参加を早くから決めていたこともあって、少々天気が心配になった。大山ロイヤルホテルまで500～600kmと記憶していた。しかし遠い昔のこと、中国道路の沿いの紅葉の微かな思い出が脳裏に浮かぶ。その日の朝は薄く霧がかかっていた。通常は長崎バイパスでもハゼの赤い紅葉が見られるが、この日の道沿いは全く青々としている。ほんの数日前までは真夏を思わせる暖かさという暑さで、温暖化の影響と考えざるをえない。長崎道から見える多良岳の方は、霧が懸かっている等スッキリしない天気が大山まで続くことになる。筑紫野のバス停から井石に同乗してもらいほっとする。連休で交通量が多い。下り線は渋滞になっている。緊張しながらの九州道であった。しかし中国道に入ると交通の様相は一変する。無気味なくらい車は少なくなる。トンネルの中は貸し切り、他の車を追いこすことはもとより、追いこされることもない。もちろん前後には車影もない。中国道を北上するにつれて、これだけを楽しみにしていた紅葉が見られてきた。米子道に入ると空はどんよりと、山の紅葉は少なく全体が暗い。しかし井石とは大山までの700km、8時間のドライブ中、この同窓会の参加者や人の気ない中国道について、さらに家族のこと、退職前後の会社こと、また将来のこと、それに政治から経済まで、色んな話で会話が途切れることは無く、久し振りに学生の時以来の話ができた。これに植村が加わっていたらなおさらのことだったと思う。次回は福岡で井石が幹事となつての開催です。その時は是非とも参加して下さい。

大山ロイヤルホテルへは4時近くに着いた。この時、別の車が玄関先に停まりそこにいたのは、都田さん、栗原さん、藤井さん、白石さん、何故ここに、もう居るのかなと思いつつカウンターへ進み手続きを済ませた。長崎から一回もガソリンを入れることなく来たため、給油

に行くことになる。メーターは限り無くEに近い。ここから7～8km先の岸本まで、ちょっと心配になるが行かざるをえない。ここまでガソリンの配達は無いだろうとのこと。後は下りであることを神頼み。宴会開始の6時30分には全員が揃った。

宴会はわいわいがやがや、籤で席を決め、それぞれの近況報告から始まった。久し振りに参加した都田、栗原、井石のそれぞれにはちょっと長めの時間が与えられた。その配取を取ったのはやはり吉弘さん。タイミングも良くスムーズに進行し、さすがでした。蟹をはじめ海の幸、山の幸と盛り沢山の料理。話は弾み、2時間半の一次会もあつと言う間の時間切れ。二次会もいつものように大盛況。好く飲み、話し、もうその表情は学生時代そのもの。この元気を明日まで持続できますように。

二日目は7時の朝食から始まった。このホテルから見る景色は、遠くは薄く霞んでくっきりしない。窓から眺める景色は松が殆ど、ゴルフ場と思われる松林の一部に微かに緑の芝生が見える。大山の紅葉はどこに有るのだろうかとちょっと心配したが、心配もつかの間、ホテルからバスで林の中を進むと緑の松とその太い赤松の幹、それに黄色（黄色でも濃淡が違う）、さらに赤い実のコトラストが良い。遠くに見える大山の山全体が紅葉している。天気が良ければさらに鮮やかに見えたであろう。

このまま西日本最大の花のテーマパーク「とっとり花回廊」に行くことになった。朝9時と早かったせいかなそれ程の観光客ではなかった。2個のササユリの花がデザインされた入場券を片手に、全員で記念撮影を済ませ1時間程散策をすることになった。鴨か鶏の親子同様親鳥に付いて行くヒヨコのように隊列を組んでのスタート。後はそれぞれのグループに分かれての散歩になった。中では花回廊コンサートの準備中であつた。10時近くになると観光客も多くなって来た。多くの花で飾られた花園ではあつたが、人工よりも自然の紅葉に惹かれる気がするのは、私だけかな。

この花園を早々に引き上げ、足立美術館へと急いだ。途中で雨が降り出し、美術館に着く頃はスコールのような雨になって来た。車から美術館の入り口まですでにビショ濡れ状態。しかしこの庭園の眺望は格別だった。庭の松の緑は鮮明に、紅葉の黄色は松の緑の鮮やかさと競うかのように、また赤色は少ない中にも凛として存在感を示していた。館内の黒縁の窓から見るその景色はカラーの立体画を見ているようだった。庭全体を見渡すところでは、庭の敷石、苔、それに圧巻だったのはバックになっている山の風景で、それらが庭に溶け込み、しかも山の稜線が上手く霧と一体化している。雨が降ってこ

その絶妙の風景になっていた。文才豊であればもっと感動が伝えられるのですが、いつか雨の日に行ってみて下さい。

昼食を済ませ、和鋼博物館でタタラの歴史を聞くことになった。帰りには草取り鎌を買った人もいた。雨のためにその後の予定は中止となり、ホテルに行くことになった。後は夕食まで休憩をとり、さらに二日目の宴会へと引き継がれて行った。休憩を入れたためか、さらに元気になっていた。これだけ元気なら未来は確かでしょう。同窓会は翌日の出雲大社詣でまで続き、それぞれ帰

宅できたのは夜遅くになっただろう。

実に楽しい同窓会でした。松村さん本当にありがとうございました。次回の博多での同窓会を楽しみにしています。今回参加した23名の面々を記しておきます。神庭(都田)文子、元井(山口)裕子、増野(白石)菘、比嘉(島袋)節子、藤井聡子、護山(田元)順子、中村(桑原)和子、広本淳子、小坂妙子、松本(吉弘)誠子、原(赤堀)好子、藤堂(星野)昭代、渡部(前田)セツ子、栗原(奥村)幸子、品川龍太郎、井石昭男、木下幸彦、富永義則、高橋正彦、藤田立明、西村正邦、下野憲夫、松村秀生



平成21年11月1日 於 とっとり花回廊

昭和42年度入学同窓会

大西 裕子(昭46)

前回のクラス会から10余年、卒後37年目の同窓会を田中秀二さん、松尾 泉さんのお世話で実現することができました。今回は24名の参加者でした。

1月11日(日)冬空の下、集合場所は長崎駅。久しぶりに出会った仲間を乗せて、送迎バスは、レストラン側の特別サービスで、近年、長崎港の玄関口に架けられた女神大橋を渡って会場へ向かいました。この橋からは鶴の港と言われる長崎の港と山々にぐるりと囲まれた長崎の街を一望に見渡すことができます。

会場となったレストラン「ザ・ヴィラス」は、今では様変わりした福田本町、学生時代のデートスポット、福田遊園地(廃園になったあと、その場所にはマンション

が立ち並んでいます)の先にある、ヨットハーバー、サンセットマリナーのすぐ側にある夕日が自慢のレストランです。

卒業後初めて顔を合わせた同窓生も、すぐに当時の面影が浮かびます。賑やかに幕が開きました。開会の前に記念写真、カメラマンは松尾 泉さんです。それなりの修正をしてくださったあとの写真を掲載しました。

会の半ばに行った、一人ひとりの近況報告は卒後37年を感じさせる、いろんな思いがこもった話が聞けました。ほとんどが還暦を過ぎ、これまでの人生とこれからの人生を少し立ち止まって考えている時期なのではないでしょうか。永いサラリーマン人生に終止符を打って、第二の人生を



楽しんでいる方、まだまだ現役で活躍中の方、一人一人のコメントに、けじめの年齢を通り過ぎた人の持つ重みを感じられました。卒業後、それぞれに歩んだ道はさまざまです。でもこうして顔を合わせると、和やかに当時の思い出話に花が咲きます。やっと今、当時の若さがいとおしく思える年齢になったのでしょうか。青春の4年間を長大薬学部生として、共に過ごしたんだと、あらためて感じさせられました。これまでの人生のなかで、この4年間が占める場所はかなり大きかったと、今更ながら認識させられました。余り勉強しなかったことだけが悔やまれますが。

賑やかに、楽しく時は流れ、あっという間に閉会の時間が来てしまいました。



ほぼ全員参加の二次会は、銅座のスナック、「ブルーシャッター」、店内ぎりぎり詰め合わせてどうにか全員が座り、“乾杯”で賑やかに始まりました。店内は熱気でムンムン、懐かしいカラオケ曲を披露しながら、当時の青春を語る人もいました。歌う曲はほとんどがみんなが知っている懐かしい曲です。はしゃぎながら、みんな当時の顔に戻っていました。時間は瞬く間に流れていきました。楽しい夜でした。

最後に、5年後の同窓会開催を全員一致で決定しました。今回、会えなかった方々に次回は会えますように、と願っています。お世話してくださった、田中さん、松尾さん、本当にお世話になりました。



平成21年1月11日 於 ザ・ウイルス

戸山 城台 岡村 西垣
 竹中 門脇 松尾 上野 篠原 稲荷 近藤 中島 中島 田中 能勢
 井手 鈴木 調 岩永 志田原 松尾 重松 田中 正久

昭和49年卒（含45年入学）同窓会

橋本 次男（昭50）



11月23日(月) 於 九十九島を眼下に「はな一」の中庭

2年に一回の同窓会は、卒後35年佐世保のハウステンボスにて11月22日(日)に開催いたしました。私は、4年前に地元の佐世保に帰り調剤薬局を開局しました。当初、開催場所の選択においていろいろ検討しましたが、ハウステンボスに決定したのは、円高によりアジアからの入場者が減少し、以前の活気がなくなってはいますが、晩秋の紅葉はすばらしく、イルミネーションによりライトアップされ、改めてハウステンボスの良さを皆に認識してもらいたためです。

当日は朝からの雨の中、亀山、馬場、原田君と私は、佐世保国際カントリー倶楽部でゴルフをして、ハウステンボスに着いたのは受付時間の午後5時頃になった。

既にほとんどの人がホテルにチェックインしていました。この日は「九州・山口薬学大会」が大分で開催されていて、大分からの参加者が少なく、最終的に男女各10名計20名の参加となりました。その中で、五島の松村君が初めて参加してくれてとても感激しました。

午後6時半よりハウステンボスのレストラン「花の家」にて会が始まり、11月22日はいい夫婦の日とのことで、唯一ご夫婦で参加した立花君の乾杯で始まりました。皆アラ還年齢となり、食事より話に夢中になりました。やがて一人一人の近況報告になり、子供のこと、孫のこと、健康のこと、仕事のことなど話題は尽きませんでした。2年後の同窓会は、緒方さん、山田さんらのお世話にて、ふぐのおいしい時期に北九州市の門司でと決まりました。

一次会が終わり外に出ると、ハウステンボス内はイルミネーションによりライトアップされていて、一番高いドムートルンが輝いていました。そこに生演奏とともに花火が始まりました。皆、しばらく夜空の花火に見とれていました。花火も終わりいざ二次会のフォレストヴィ



11月22日(日) 於 ハウステンボス内レストラン「花の家」

亀山	古賀	山田	松井	今村	立花	松村
	(森西)	(黄)	(売豆紀)	灘		
		西岡	橋本			
		(穴吹)				岡本
馬場	阿部	緒方	馬場	立花	原田	木宮
	(中村)	(高石)	(本多)	(嘉本)		(大越)
						森 大平

ラの私の部屋へ、ビール、ワインなどを飲みながらここでも話は尽きませんでした。

二次会も終わり、同部屋の立花君としばらく話しベッドに行くと、隣のベッドで亀山君が高イビキ（ゴルフの疲れが出たのかなあ……）お陰で朝までほとんど眠れませんでした。

翌朝はすばらしい天気、11名は九十九島観光へ、車4台に分乗しハウステンボスを出発、30分くらいで九十九島の入口西海パールシーリゾートへ、そこから九十九島のクルージング、この日は本当にすばらしい天気、皆

九十九島の景色を満喫したようです。

下船後は、今年7月リニューアルオープンした水族館「海きらら」にてイルカショー、ノーベル化学賞を受賞された下村 脩先生のクラゲの展示コーナーなど熱心に見ていました。特にカメラが趣味の大平君のその熱心さは印象的でした。

昼食は、九十九島を眼下に見る割烹「はな一」、食事より景色がごちそうのようで皆改めて九十九島の景色に見とれていました。その後佐世保駅まで皆を送り、2年後の再会を約束し散会しました。

エイチ H会ゴルフについて

大木 豊（昭52）

私は大学院の昭和52年～56年の学年理事になっていきますので、毎年原稿の依頼があります。しかしながら、大学院は5年間をまとめているし、他の大学卒業の同窓生もいるので、ほとんど交流はありません。よって、学年理事としての内容ではなく、一同窓生の立場から、「H会ゴルフ」というゴルフ仲間のことについて投稿をさせていただきます。H会ゴルフについての説明は、次のとおりです。

1 平成14年8月、薬品合成化学研究室元教授で元薬学部長の古川 淳先生の第3の人生の門出を祝うため、ながさき式見ハイツで「古川先生を囲む会」を開催した時の世話人4人で始めました。

2 その時の世話人、馬場満輝（昭49）、田原 務（昭51）、大木 豊、濱田哲也（昭54）の4人で、同年同月に第1回目のゴルフ、「古川先生を囲む会」ゴルフを開催しました。

3 「古川（Hurukawa）先生を囲む会」の頭文字の「H」を取って、第2回の同年10月のゴルフから「H会ゴルフ」としました。

その後、平成21年9月までに合計30回のH会ゴルフを実施しています。

4 奇しくも、ゴルフのメンバーの名前にも、次のように「H」が付いていました。ちょっとこじつけの感もありますが。

馬場満輝（Ha` Ha`） 田原 務（TaHara）
大木 豊（OHki） 濱田哲也（Hamada）

決して、いやらしい意味ではありませんので、お間違えのないように。

5 その後参加されるようになった、原田 均氏（Harada）（昭51）、平田敏男氏（Hirata）（昭54）、平川善章氏（Hirakawa）（昭63）、秋吉隆治氏（Akiyoshi）（平3）にも、奇しくも「H」が付いています。

6 H会ゴルフでは、ゴルフの技術向上を目指して、全てのショートホールで、少額のニアピン賞獲得競争を

実施しています。

第1打がだれもグリーンオンできなければ、そのホールはニアピン賞不成立になります。なお、ニアピン賞獲得競争への参加は任意です。

7 開催場所は、原則として、H会会員が会員権を持っているゴルフ場において、長崎国際ゴルフ倶楽部、長崎パークカントリークラブ、喜々津カントリー倶楽部の順に、キャディ付きで、奇数月に実施しています。たまに、臨時的開催や、他のゴルフ場で開催することもあります。

ついでに、ゴルフに対する思いを書かせてもらいます。私は、小学5年から高校3年まで柔道をしていました。自慢話になりますが、高3の長崎県高体連では重量級個人戦で準優勝をしました。長崎県職員になってからも県庁柔道部に所属し、長崎市内の試合にも何度か出場したこともあります。そして、昇段試験を受けて三段も取りました。

薬学部に入學した時、尾上忠則（現 板倉）先輩（昭49）に、高3女子の家庭教師の口を紹介してもらったことと、当時の人気テレビ漫画「巨人の星」の伴 宙太に例えて、「お前がキャッチャーとしてマスクをかぶり、4番を打つ時、長葉野球部の黄金時代が訪れる。」という殺し文句により、薬学部野球部に入りました。しかしながら、田舎育ちで柔道ばかりしてきた私は、野球のことは技術的なこととルールもほとんど知りませんでした。それでも声と体と態度の大きさからキャプテンにまななってしまいました。キャッチャーになりその役割の重要さが分かり、技術的なこととルールについて一生懸命勉強しましたし、練習も一生懸命やりました。残念ながら黄金時代は来ませんでした。その後就職した後も職場の球技大会では、野球かソフトボールの選手に選ばれ多くの人と交流を深めることが出来ましたし、現在お付き合いをいただいている人の多くも野球部での友人です。野球部に誘っていただいた尾上先輩には大変感謝

しています。

以上のように、柔道と野球については一応一人前のことが言えると、自分勝手に思い込み、柔道・野球と比べてゴルフの良さを述べさせてもらいます。

まず、この年になっても上達を願って熱心に練習したり、優勝を目指してコンペにも参加できることです。柔道や野球では怪我が心配で、試合に出て一生懸命頑張るなどは無理です。プロゴルフの世界では、今年の中日クラウンズで当時17歳の石川 遼と71歳の杉原輝雄が戦っています。プロスポーツの世界で孫の年代を相手にする種目が他にあるでしょうか。

次に、ゴルフが紳士のスポーツといわれるように、エチケットやマナーを大事にして、他人のことを思いやるスポーツであることです。柔道でも礼節を大切にしますが、なんと言っても格闘技ですから、試合中に相手を思いやることはありません。野球は、野次も戦法のうちだ

と教えられましたが、最初はなじみませんでした。

次に、自然に親しむスポーツであることです。ひところゴルフ場の建設により、自然を破壊するようなことが言われましたが、ゴルフ場は自然をほとんどそのまま残していますので、レジャーランドなどの箱物建設よりはるがいぶんまじでしょう。他にもいろいろあると思いますがこの辺にしておきます。

私は、体調を崩して、職場の上司や同僚には大変な迷惑をかけたまま、今年退職しましたが、この原稿を書けるまでになったのは、ゴルフとH会のおかげだと感謝しています。

最後に、H会ゴルフの命名のきっかけとなった古川先生には、何もお知らせしていませんでしたので、この場をお借りして、H会についてご承諾いただきたいと思えます。

長薬同窓生の皆さん！今年も「シバカリ会」が元気に開催されました

中嶋 幹郎（昭57）

平成21年9月5日(土)に、約3年ぶりの「シバカリ会」が、今回もとても楽しい雰囲気にも包まれながら開催されました。前回は、平成18年の夏に、シバカリ会“発祥の地”である長崎市新地中華街の老舗「新和楼」での開催でしたが、今回は、全国から会員が集まりやすく、柴崎先生のご自宅からも近くてご夫妻にお越しいただきやすいという理由から、初めての「福岡市天神地区のホテル」での開催となりました。

本「シバカリ会」は、長薬の名門中の名門？薬剤学研究室の前教授・柴崎壽一郎先生の教え子の集まりで、私が長崎大学に入学するずっと前の昭和40年代から続いている歴史ある研究室同門会です。今でも2年に1回程度のペースを守りながら開催されています。

実は、柴崎先生はこのような集まりがとても苦手な様子で、「シバカリ会」の折には毎回、誰かが福岡県甘木市のご自宅へ先生をお迎えに行き、先生と奥様を会場までお連れする（拉致？）ことが常でした。

しかし今回は、なんと、柴崎先生から「そろそろシバカリ会を開催してもよろしい」との誠に有難いお言葉を頂戴しました。私の記憶では「シバカリ会」の開催にあたり、先生から事前の承諾を得たことはありませんでしたので、先生の心境の変化にびっくりしました。そこで、私と同級生の三浦修己くん（昭57）の二人が幹事を務め、「セントラルホテルフクオカ」での開催が実現しました。

私はこの「シバカリ会」が大好きで、柴崎先生の門下生となって以来、毎回欠かさず出席しています。また現在は母校である長崎大学薬学部勤務していることもあり、「シバカリ会」の連絡係を務めさせて頂いていま

す。

今回も50名を超える教え子が集まりましたが、開催日があいにくFIP国際学会のご出張と重なったため、「シバカリ会」には必ず出席される小西良士先生（柴崎先生が教授時代に一緒に助教をお務めでいらしゃった先生で、シバカリ会には欠かせない恩師の先生）ご夫妻にご出席して頂くことができませんでした。しかし、小西先生からの心温まるサプライズ・メールが出張先のイスタンブールから届き、柴崎先生もとても喜んでおられました。また、今回、柴崎先生から「そろそろシバカリ会を開催してもよろしい」との有難いお言葉を頂戴できたのは、幹事の三浦くんの努力の賜物であったこともわかりました。

この「シバカリ会」では、学生時代に薬剤学研究室と一緒に過ごした先輩、同級生、後輩と当時の懐かしい思い出を語り合ったり、また今の仕事や家庭の近況等を話し合ったりすることができ、私はいつもその中から元気をもらっていると感じています。今回も懐かしいメンバーと会うことができ、とても幸せでした。このような素敵な研究室に入ることができた自分はとても幸運だと感謝しています。しかし「シバカリ会」に参加して一番嬉しいことは、今の柴崎先生の元気なお姿を拝見しながら、自分が学生時代に薬剤学研究室にいた時と同じように、先生の楽しい大阪弁調子のマシンガントーク「柴崎節」を聞かせて頂けることです。この「長薬同窓会報」にも以前書かせて頂いておりますが、この柴崎節の渦の中にわが身が溺れていく心地良さは、私にとって最高に幸せな時間の一つです。とても癒されている気持ちにな

るのです。この気持ちは柴崎先生の教え子にしか理解できないかも知れませんが、きっと「シバカリ会」会員の皆さんには共感して頂けると思います。今回の「シバカリ会」でも先生の柴崎節は健在で、会場は優しい笑いの渦に包まれていました。

「シバカリ会」の折、次の「シバカリ会」の話を出すと、先生は「もうあかん」、「もうあかん」とおっしゃるのですが、今回は少し様子が違ってました。柴崎先生は「もうあかん」とは言わずに、「皆が良ければ、来な～あかんかな」とおっしゃってくださったのです。アン・ピリーパブル!!しかし本当に「来な～あかんかな」とおっしゃってくださったのです。素晴らしい!!ありがとうございます!!本当にありがとうございます!!

そこで、「シバカリ会」会員の皆さんに宣言します。次回の「シバカリ会」は、来年平成22年に、場所は今回と同様、福岡市にて開催させていただきます。三浦くんも宜しくお願いします。もちろん、小西先生のご都合も伺ってから日程を考えさせていただきますので、皆さん!小西先生に会えますよ。

柴崎先生!来年は小西先生にも出席して頂ける日にちにしますので、是非楽しみに待っていてください。

それでは、次回は平成22年に「シバカリ会」会員の皆さんと柴崎先生、小西先生が一同に集う会が開催できると思います。今回欠席された皆さんとは、是非、次回の「シバカリ会」でお会いしたいですね。

今回も、実に楽しい栄養たっぷりの「シバカリ会」を、教え子一同にプレゼントして下さった柴崎先生に感謝するとともに、先生と奥様の益々のご健康を祈念して報告とさせていただきます。

今回の出席者は次の通りでした。なお、間違い等があ

りましたら何卒ご容赦ください。

恩師 柴崎壽一郎先生ご夫妻

- | | |
|------------|-------------|
| 柴田智加恵(昭38) | 田中 博輝(昭39) |
| 江藤 好信(昭40) | 黒川 征史(昭40) |
| 松本 功治(昭41) | 井田 節子(昭41) |
| 伊豫屋偉夫(昭41) | 太田 和子(昭41) |
| 平山 文俊(昭41) | 黒田 諒美(昭41) |
| 山中 國暉(昭43) | 藤井 聡子(昭44) |
| 松村 秀生(昭44) | 小池 正博(昭47) |
| 中西多香子(昭47) | 田代佐夫子(院昭48) |
| 相川 康博(昭48) | 井手 清(昭48) |
| 中原 照子(昭49) | 森 つよ子(昭49) |
| 松本美智子(昭50) | 三島みずほ(昭50) |
| 末安 正典(昭52) | 末安 智子(昭52) |
| 坂田富美子(昭52) | 大淵 倫子(昭53) |
| 坂元まゆみ(昭53) | 藤井 実(昭53) |
| 馬場 優子(昭54) | 原村 直子(昭54) |
| 都留 君佳(昭55) | 長尾 光益(院昭55) |
| 高崎 光恵(昭56) | 吉岡 優子(昭56) |
| 大田寿美子(昭56) | 三浦 修己(昭57) |
| 中嶋 幹郎(昭57) | 中倉 政司(昭57) |
| 木山 容子(昭57) | 林田まゆみ(昭57) |
| 隅中 芳美(昭57) | 三浦 徳子(昭58) |
| 相葉 啓子(昭58) | 磯部有紀子(昭58) |
| 林 幸恵(昭59) | 吉森 由香(昭59) |
| 内海 美保(昭59) | 鷲尾 兼寿(昭59) |
| 木山 雄一(昭59) | 塩田 英雄(昭60) |
| 高山 陽子(昭62) | 芝口 浩智(昭63) |
| 三輪 高市(院平1) | 山崎 幸雄(平1) |



平成21年9月5日 於 セントラルホテルフクオカ

昭和57年3月卒業生の学年同窓会を開催しました

中嶋 幹郎 (昭57)

平成21年3月7日(土)午後6時から、我々昭和57年3月卒業生の学年同窓会が久しぶりに開かれました。

これまでは、長崎港内のリゾートアイランド“伊王島”での1泊2日の「リゾート同窓会」や長崎市内の老舗旅館“坂本屋”での「卓袱同窓会」などを催してきましたが、今回は、母校の大先輩である下村博士のノーベル化学賞の受賞で活気に溢れる“長崎大学薬学部”での「キャンパス同窓会」を開催する運びとなりました。

しかし、さすがに文教町のキャンパスの中で宴会をすることはできないので、皆が学生時代に一度は行ったことがある大学正門前のレストラン“フラワーメイト”を予約し、そこから懐かしい文教キャンパスを眺めながらの宴会となりました。

幹事は、私と高良真也くん、林田(林田)まゆみさん、中西(中村)美由紀さんの4名が担当し、遠くは埼玉県や愛知県からの参加者も含めて30名ほどの集まりとなりました。出席者は以下の通りです。(敬称略)

木山(池田)容子、隅中(上田)芳美、池崎(蒲川)尚子、天野(甲斐)順子、森田(酒井)明美、嶋本正実、堀田(鈴木)千加子、石橋(武富)福美、中嶋幹郎、濱本知之、林田(林田)まゆみ、藤田(御手洗)聡子、岡本(宮岡)信恵、川内(宮崎)順子、山本(山口)ひとみ、渡辺修二、池田光政、本多(大森)裕子、中島(窪地)敏樹、高良真也、入来(田之上)佳子、寺尾敏光、中西(中村)美由紀、長尾祐二、福崎(平尾)朋子、本川靖政、三浦(真茅)修己、入舩(宮永)直美、吉田(若松)智子。

私は長崎市内に住んでいるため、学年同窓会には毎回

欠かさずに出席しています。学生時代の同級生と当時の懐かしい思い出を語り合ったり、また今の仕事や家庭の近況等を話し合ったりすることができる学年同窓会は、とても気持ちが休まる空間の一つで、毎回何かしら元気をもらっています。

今回の学年同窓会でも、再会した直後には、「へー昔の君かー、へー昔のさんかー」という感じでしたが、会話がスタートすると卒業からの月日はあっという間に縮まってしまいました。学生時代には全く会話をしたことがなかった女子の同窓生とも、同窓会では、楽しく話が盛り上がります。また、我々の学年は、当時の大学入試制度の共通一次試験が始まる1年前の昭和53年4月に大学に入学した学年で、昭和57年3月卒業生86名の内訳は、女子学生が50名に対して男子学生が36名と、当時としては男子学生の割合が極めて多い学年でした。今の時代の薬学部では、男子学生の人数が36名といっても普通ですが、当時の薬学部では男子学生の割合がとても多く、たいへん活発な学年でした。そのような理由もあり、昭和57年3月卒業生は6月の合宿研修の前コンや後コン(現在は催されていません)や、11月の薬学祭など何か催し事がある度に、とても活発に活動し過ぎたためか、薬学部の先生方の記憶や、学年が異なる同窓生の皆さんの記憶に、強い印象を残している有名人が何人も輩出されている学年だと自負?しています。誰が有名人かは、皆さんのご想像にお任せします。

“フラワーメイト”でのなごやかな懇談の後は、「キャンパス同窓会」らしく会場を薬学部に移し、“夜の薬学



平成21年3月7日 於 フラワーメイト

部ツアー”を楽しみました。そして最後は正門前の“カラオケボックス”で夜遅くまで皆で愉快地盛り上がることができました。最後は、次回同窓会での再会を約束してのお開きになりました。

今回、出席できなかった昭和57年3月卒業生の皆さん！同窓会は楽しいですよ。次は、卒業30年を記念しての同窓会を企画しますので、是非、その時にお会いしましょう。

長 薬 三 味 な 10 月

金子 富美 (昭59)

10月3日(土) お月見の日

昭和57年卒の山下妙子先輩のジャズライブを聴きに、同級生の上村義子さんと福岡市中央区赤坂の CALLOWAY というライブハウスへ行く。

山下先輩とは紫陽会(福岡県内&近郊の女子長薬卒業生の会)でこのところ毎年御一緒させていただいて、とても美人で、しゃきとした方だなあ……と思っていた方なのですが、昨年の紫陽会の近況報告で「最近ジャズヴォーカル習い始めました!!」と聞き、気になっていたところ、今年の紫陽会のあとすぐに、ライブのご案内を載いて、喜んで伺いました。初めてのライブとは思えない、素晴らしい、堂々とした唄いっぷりと力強い歌声に魅了され、さらに、バックで渋いギターを弾いていらっしやった方が、旦那様だと知り、共にブルマンだった上村さんと羨ましいなあ!!と美しい月を仰ぎながら帰りました。

私たちが在学時、ブルマンの先輩方に誘われて、長崎の病院のダンスパーティの演奏に出かけ、先輩方と競演させて頂いたりしていましたが、我々は、卒業以来演奏していません。卒業四半世紀を迎え、ちょっとバンドの虫(!?)がむずむずしてきました。

10月11日(日)

ノーベル化学賞を昨年受賞された下村 脩先生の基調講演(座長:中島憲一郎副学長)を拝聴しに、滋賀で開催された日本薬剤師会学術大会へ参加。

朝からものすごい行列に一瞬ためらいながらも並び、どうにか私は会場のびわ湖ホールが一番後ろの席で聴くことができました。3月の中部講堂での講演は、席が少ないと聞き、断念していただけに、生の先生のご講演を聴くことができ、感動!!

導かれるようにして、クラゲと出会い、GFP にたどり着いたご苦労をユーモアも交えつつお話され、満員の客席は熱心に聞き入っていましたが、小林五郎先生のお名前がでた時には、在校時に急逝された五郎先生を思い出し、涙が出そうでした。被爆直後の写真もスライドに盛り込まれ、アメリカのオバマ大統領のノーベル平和賞受賞直後だけに、改めて核のない世界の実現を願いました。また、基礎研究の強化の必要性に言及され、「どんな困難な状況にあってもあきらめるな」というメッセー

ジも伝えられ、地味に基礎的研究をやっている私は、勇気を頂きました。また下村先生の直後に登壇された女優の吉永さゆりさんが、下村先生のご親戚だったということが、ノーベル賞受賞の報道をきっかけに発覚したというエピソードを披露され、驚きました。

10月22日(休)

大牟田薬剤師会の理事を勤める同級生の森田宏樹君にお招きいただき、お話伺う。

会場で昭和60年卒業の後輩お二人に声をかけていただき、嬉しい再会でした。薬の世界にいたら、思いがけず後輩にお会いできるのだと、薬の世界でも仕事をしていて、良かったなあとしみじみ思いました。

研修会終了後、森田君と白谷さんと同級生トリオで、今後の薬剤師像について熱く語ってしまいました。“なんちゃって薬剤師”の私は、大ベテラン薬剤師のお二人の話聴きながら、反省しきりの夜でした。

10月24日(土)・25日(日)

第19回日本医療薬学会年会「医療薬学の創る未来：科学と臨床の融合」に参加する為、長崎へ伺う。

平成10年卒業の西村さんの発表を同級生の中垣春美さんと並んで聴き、研修生受け入れに備え、奮闘している姿に感心。受け入れ体制の構築で、病院でも薬局でも大変な時期に突入していることを垣間見ることができました。

また、今仕事をしているGEメーカーのブースにいたところ、平成元年卒業の佐々木さんにお声をかけていただきました。福岡支部浦陵会では毎年お会いするものの、偶然、それも長崎でお会いできたので、新鮮な再会でした。

中垣さんとは、思案橋の土曜の夜も久々に楽しみましたが、路面電車が120円になっていたのには驚きました。我々の時代は80円で、ついこの間まで100円だったのに……。

平日から長崎に入れば、文教キャンパスまで行き、恩師の北村美江先生や同級生の伊藤潔君にも会えたのに……と思っていた最終日、会場移動の際に、中島憲一郎副学長とばったりお会いすることができました。9月に福岡支部浦陵会で「21世紀の薬剤師像をアップしよ

う！」というテーマで、長葉が取り組んでいる新薬学教育制度に即した教育のご紹介と下村先生のノーベル化学賞授賞式と業績についてお話を下さっていましたが、変革の時代に薬学教育の重責を担っていらっしゃる先生方のご苦労もいかに感じました。

とまあ、徒然なるままに、長葉三昧の10月を日記風に書いてみました。

最後に福岡の女性の会、紫陽会に関して一言お知らせさせていただきます。

紫陽会は、会長とか役員などの組織もなく、地味ながら女性の気楽な会で、毎年紫陽花の季節に、美味しいものを楽しく食べよう!! という感じで開催されています。

今年まで3年連続で平成12年卒の黒岩さんと坂本さん

が幹事をしてくださいました。毎年幹事は交代すべきところ、なかなかバトンタッチできなかったのですが、来年は昭和60年卒の方々が幹事を引き受けてくださいました。私も、この会の始まりや組織そのものについて、よく解っていないのですが、我々59年卒は福岡県在住が多いので、行ける限りは毎年参加しています。

組織としては、成り立ちがソフトな分、通信費なども抑えなければいけない状況もあり、学年代表の方にお葉書を出し、その方に同級生の方々への連絡をお願いするシステムになっています。そのせいか、連絡がうまく伝わっていないこともあるようです。もし、紫陽会に興味のある方は、どうぞ同窓会本部へご連絡ください。

皆様よいお年を!!

平成62年度入学生 同窓会

杉浦 志保(平3)

2009年10月31日、昭和62年度入学生が8年ぶりの同窓会に集合しました。大半は平成3年の卒業なのですが、大学が大好きな人もいて卒業年度が微妙に違うので、私たちは昭和62年度入学ということで集まっています。前は平成13年に、卒業10年後ということで同窓会を実施しましたが、今回はさらに8年を経ての再会となりました。集まった顔ぶれは卒業時と変わらない(皆20年前と全然変わらない!と思ったのは私だけでしょうか) 屈託のない笑顔ばかりでした。

参加人数は28名、会場は長崎市銅座の落ち着いた和食のお店で、地産の美味しい食事とお酒に舌鼓をうちながら、賑やかに会話が弾みました。「実験パートナーだった誰々...」「研究室での出来事で...」等の学生時代の話もありましたが、自然と話題は近況報告に。「現在どこに住んでいるか」、「仕事は に勤めてどんなことをしているか」、「病院の薬局長になった」、「結婚し子供は何歳になった」、「最近ワインに凝っている」、「パレエを始めた」等等。確かに卒業後20年といえば、年



年齢としては40代に到達し、いわゆる中堅として充実かつ多忙な時期にさしかかっていると言えるでしょう。まさに今回の同窓会においては、再会した同窓生達がそれぞれ様々な環境・立場で、社会・家庭・仕事での役割を日々営んでいることを聞き、皆さんが長崎大学薬学部で共に学んだ知識・経験をベースに頑張っているのだなあ、と万感交際の思いでした。そして、たとえ何年経っても、同窓生という絆の元に笑顔で集合できることに、皆さんの母校や仲間に対する誇りと慈しみを実感しました。

各自思い思いの歓談はつきませんでした。楽しい時間はあっという間に過ぎてしまい、最後に、幹事より、「次回同窓会はさらに10年後、つまり50代となり子育ても落ち着いている頃に開催とし、さらにパワーアップ

して温泉に集まりましょう！」との提案があり、拍手喝采にて締めくくりとなりました。

私自身は、卒業後は長崎を離れ東京で生活をしていましたが、久しぶりに同窓生に再会し親睦を深めることができたことに大変刺激を受け、同時に、心よりリフレッシュさせていただきましたので、今回再会した同窓生の皆さんへ感謝の気持ちでいっぱいとなり帰途についた次第です。そして、また10年後の再会を楽しみに、日々頑張ろうと思っております。

末筆となりますが、同窓会幹事；長崎大学病院副薬剤部長 北原隆志氏、光晴会病院薬剤科長 成末まさみ氏に対し、今回の会の開催・運営・指揮を取り纏めいただいたことを深く感謝申し上げます。

平成12年卒クラス会および近況だより

松永 隼人（平12）

長大薬学部を卒業して早10年目、久方のクラス会を10月3日に開催致しました。今回は、卒業生の約4分の1程度の小規模な集まりとなりましたが、クラス会を企画するにあたり、多数の卒業生と連絡を取ることが出来ました。皆、社会で主人公となるべく活躍し、あるいは、父、母となり、責任ある生き方をしていると感じ入った次第です。出会った瞬間は、懐かしさと気恥ずかしさが胸に去来したのですが、乾杯の後は10年前にタイムスリップしたようでした。今、彼はどうしているのだ、彼女は第二子が生まれたただの話が尽きることはありませんでした。「みんな、変わってなかったねー。嬉しいよ！」

自宅に帰り思い出すと、楽しかったクラス会が夢まぼろしの感じられ、少し寂しくなりました。もう、あの頃には戻れないけど、いつまでも繋がっている仲間だと再確認できた貴重な1日となりました。心と心は繋がっていて、決して切れることは無いのだと思います。「みんなは、どうだったかな？」

お忙しい中、この度のクラス会の企画をしてくださった方々、並びに遠路はるばる参加してくれた方々に改めてこの場を借りて感謝致します。最後に、クラス全員である友人達に一言。「また、クラス会やるからね。その時を楽しみにしているよ。みんな、会いたいだから。おお、心の友よー!!」



第二回薬品分析化学研究室同門会

杉原 住香（平13）

平成21年11月22日、第二回薬品分析化学研究室の同門会が長崎市梅松鶴にて開催されました。前回2004年の開催から5年が経過し、今回はめでたく薬品分析化学研究室発足10年目にあたるということで、開催されることとなりました。

長崎以外で就職、結婚をした人が多い中、日本各地よりたくさんの方々が集まり、黒田教授のご挨拶で会は始まりました。現在の薬品分析化学研究室は、私が研究室

在籍中学生だった岸川さんが准教授として、大山さんが助教として黒田先生をサポートされており、時の流れを感じました。しかし、黒田教授の当時と変わらぬ穏やかな口調が、私達を徐々に学生時代の気持ちに戻していてくれました。その後、長崎の海の幸に舌鼓をうちながら、近況を報告しあいました。話はつきず、会が終わっても、宿泊者は部屋で遅くまで二次会をしていたほどです。



翌日は、軽い寝不足にもかかわらず、気持ちは若返っていました。今回は参加できなかった同門生も次回は参加してみてもはどうでしょうか？日頃と違う、懐かしい出

会いが日常の疲れを癒し、リフレッシュできることと思います。

最後に、今回、幹事をして下さった大山さん、ありがとうございました。

なお、今回の出席者は以下の方々でした。

黒田 直敬先生	岸川 直哉(平10)
大山 要(平12)	村崎奈緒子(平12)
武村(木下)由美(平13)	赤司 薫(平13)
杉原 住香(平13)	江口(城田)昌恵(平14)
林(中村)訓子(平14)	山口(一番ヶ瀬)智子(院平15)
荒川 幸(平15)	藤井 収(平15)
白澤 由美(平16)	澤勢(濱田)直子(平16)
濱邊 千絵(平16)	山口 伸也(平17)
藤本恵美子(平17)	才木 茜(平18)



平成21年11月22日 於 梅松鶴

衛生化学研究室10周年同門会報告

藤本 勝好(平15)

去る平成21年10月31日、長崎パークサイドホテルにおいて、衛生化学研究室10周年同門会を開催しました(平成18年10月28日には同7周年会も開催)。卒業生、在学学生、教職員を併せて総勢48名が出席した、盛大な会となりました。

会は中山守雄教授にご挨拶して頂いた後、京都から駆けつけて頂いた小野正博先生の乾杯のご発声により幕が開きました。その後、先輩方や同級生の近況報告に耳を傾け、楽しく歓談しました。また、卒業生と在学学生の交

流も活発に行われていました。卒業生が薬剤師あるいは製薬企業・研究機関等で活躍している様子や、在校生が熱心に研究に取り組んでいる様子に、私も大変勇気付けられました。私自身、日夜研究に励んでいたあの頃を懐かしく思い出し、当時の沸々とした情熱が甦るのを感じました。続いて、中山教授から、平成21年10月16日付で本研究室に赴任された淵上剛志先生の紹介が行われました。さらに、原武 衛先生から研究室の近年の研究成果が披露されました。集合写真を撮影した後、同門会会長

である安本和善氏（平13）による閉会の辞と、衛生化学研究室の今後の益々の発展と皆様の一層のご活躍を祈念し、5年後、15周年同門会の開催と再会を約して解散と

なりました。ご参集いただいた先生方および卒業生、在学生、案内状の発送から会場設定までのお世話をしてくれた皆様方に深く感謝申し上げます。



平成21年10月31日 於 長崎パークサイドホテル

ぐびろが丘下の薬専防空壕跡地にある慰霊碑周辺の清掃

古賀健太郎（平20）

平成21年8月2日の日曜日、毎年恒例のぐびろが丘下、薬専防空壕跡地にある慰霊碑周辺の清掃が行われました。この清掃活動は毎年8月の第一日曜日に行われており、今回で節目の10回目を数えるそうです。まだ梅雨明けは発表されていませんでしたが、夏の強い日差しの中、長崎大学薬学部OBの方々・大学院生・学部生の総勢29名が参加し、各々が首や額にタオルを巻き、汗だくになりながらもてきぱきと作業を進めていくと、あっという間に慰霊碑周辺がきれいになりました。1時間半程度の時

間でしたが、作業に熱中していたせいか、私はそれよりも短く感じ、充実した時間を過ごすことができました。

清掃終了後、慰霊碑に線香をあげ、田崎和之先生（昭22）のお話を聞きました。私は今回で5回目の参加となりましたが、毎回田崎先生の貴重なお話 - 戦争当時や先生ご自身の体験談 - を聞かされた時に戦争の悲惨さや理不尽さ、犠牲になってしまった先輩方の無念さがひしひしと伝わってきて、つい目頭が熱くなります。また、今回初めて参加した学生達に感想を聞いても、田崎先生のお話



に衝撃を受け、今まで以上に深く考えるところがあったと皆が口を揃えていました。このような貴重な体験談を、私を含め県外出身者が多い学生たちに、毎回お話してくださる田崎先生にこの場をおかりしまして、深く御礼を申し上げます。

その後、場所を近く中華料理店に移し、皆で薬学部校歌を斉唱後、田崎先生のさらなる詳細なお話を伺いました。このぐびろが丘清掃活動は、戦争当時の貴重な話

を聞くことができるということは言うまでもなく、様々な年代の先輩方が参加するため、交友もさらに広げることができます。長崎大学薬学部在籍していた先輩方・在籍している学生諸君はこの活動に参加しない手はないと思います。ぜひ一度、このぐびろが丘清掃活動に参加してみてください。そうすると、この活動の魅力を実感し、この活動がさらに発展していくことでしょう。

第二回薬物治療学研究室同門会を開催して

上村 理紗（平20）

去る10月17日、割烹ひぐち浦上店にて、第二回薬物治療学研究室同門会を開催いたしました。薬物治療学研究室は、平成11年4月に故村田育夫先生の下創立された、薬学部ではまだまだ若い研究室です。今年は、塚元先生の教授就任5年目という節目の年でもあり、多くの先輩方が（何と一期生から!!）ご参加くださいました。2年前から発足した同門会は、同時に村田先生のお墓参りの日でもあります。同門会の前に、西山にある先生のお墓の前で村田先生に研究室やそれぞれの近況を報告しました。

今回の同門会では、卒業生、現役生合わせて32名が出席しました。先輩方は、先生方と近況報告や研究室時代の思い出話を花を咲かせておられました。また、最初は緊張気味だった現役生にとっても、知り合いの先輩を通じて、何代も上の先輩方と交流を持つことができ、進路

の話など今後の大きな糧になる非常に貴重な時間となりました。私も先輩方との話に夢中で、最後の集合写真を撮り損ってしまいましたが、多方面でご活躍されている先輩方を輩出したこの研究室に所属できたことを非常に誇りに思いました。

現在の薬物治療学研究室ですが、昨年度から准教授に近藤先生が、そして今年度から助教に薬物治療学研究室の卒業生の稲嶺先生（平18）が就任され、塚元先生の下、総勢30名の大所帯となりました。第一線でご活躍されている先輩方に恥じないよう、私たち現役生も今後の研究生活を頑張っていきたいと思っております。

最後になりますが、今回残念ながら同門会に参加できなかった先輩方も、2年後の同門会にはぜひご参加ください。現役一同、心よりお待ちしております。



九薬連開催される

川崎 亮平（学部3年）

平成21年5月3日～5日の3日間の日程で、第52九州薬学連盟体育大会が福岡大学で開催されました。

薬学サークルに所属している学生達が、日頃の活動の成果を発揮し、それぞれの球技で奮闘しました。長崎大

学はバスケが3位でした。また、今年は初めて長崎大学薬学バレー部が大会に参加しました。来年は長崎で開催の予定です。

各球技の結果を紹介します。

野球部

- ・第一試合 長崎大学 9 - 11 崇城大学
- ・第二試合 長崎大学 16 - 18 熊本大学



硬式テニス部

- ・予選リーグ
 - 長崎大学 - 福岡大学 負け
 - 長崎大学 - 九州保健福祉大学 負け
- ・トーナメント
 - 長崎大学 - 熊本大学 負け

男子バスケットボール部 3位

- ・予選リーグ
 - 長崎大学 63 - 52 九州保健福祉大学
 - 長崎大学 72 - 54 第一薬科大学
- ・準決勝
 - 長崎大学 64 - 68 熊本大学
- ・3位決定戦
 - 長崎大学 72 - 66 九州保健福祉大学

サッカー部

- ・予選リーグ
 - 長崎大学 2 - 0 第一薬科大学
 - 長崎大学 3 - 1 熊本大学

長崎大学 1 - 3 崇城大学

- ・準決勝
 - 長崎大学 3 P K 5 九州保健福祉大学
- ・三位決定戦
 - 長崎大学 2 P K 4 九州大学



バドミントン部

- 長崎大学 - 崇城大学 負け
- 長崎大学 - 福岡大学 負け
- 長崎大学 - 熊本大学 負け



軟式テニス部

長崎大学 2 - 3 第一薬科大学

バレー部

- ・男子 3位
- ・女子 4位

旧小野島校舎跡地記念碑周辺の清掃

伊藤 潔 (昭59)

毎年行う事業計画の一つである旧小野島校舎跡地記念碑周辺の清掃の模様をお伝えします。

週の前半に久しぶりにまとまった雨が降り、後半も少しぐずつき模様の天気。第3週となった15日は朝

からくもり空。雨の心配はなさそうでしたが、少々低めの気温となった日曜日でした。柏葉会館前に集合した麻生(昭24)、木下(昭35)、伊豫屋(昭41)、富永(昭44)、伊藤(昭59)、和田(平4)、岸川(平10)、武次(事務

局)の8名は、富永先生と和田先生の2台の車に分乗して予定通り10時に出発しました。40分ほどで目的地に到着すると、現地集合の峰(昭26)、松本(昭24)、吉田(昭37)の3名と合流し、11名で清掃作業に取りかかりました。



写真を見てもおわかりのように、雑草の量も少なく40分ほどできれいになり、11名そろっての記念撮影で終了としました。とはいうものの、鎌やはさみを使ってのかがみながらの作業は、慣れない者には結構大変で、麻生、松本、峰の小野島会メンバーである大先輩方に大活躍していただいてしまいました。申し訳ありませんでしたといいますが、ありがとうございます。食事の時の話でも話題になりましたが、小野島会のメンバーの方々の方が一番お元気だという印象です。「よく歩いたし」とは麻生先生の弁ですが、見習うべきことは多々ありそうです。



その後は後片付けをして、諫早市内のうなぎ屋に移動し、昨年に引き続き、小野島会メンバーの3名からいろいろなお話をお聞きすることになりました。終戦後、佐賀市上多布施町の仮校舎で講義をしていた薬学専門部は、一時は九大に移るような話も出たようですが、昭和22年からは小野島の地に移ったという当時のお話から始まり、その前の原爆前後の話も含めてお聞きすることができました。昭和24年卒の麻生先生、松本先生たちが第一回目の国家試験を受験された年代だそうで、最初の問題が何だったかと言うことまで記憶に残っていらっしゃるようでした。昭和26年卒の峰先生からは、同級生である下村脩先生のお話もいくつかお聞きしました。下村先生は国家試験には合格したが、薬剤師免許の申請はしていないようだということです。また、ブドウ酒は日本薬局方に収載されている医薬品であるから昼間から飲んでいても……といった話も出ていました。お恥ずかしながら、局方など何年も見たことがありませんでしたので、ただただ「へえ～」と感心するしかありませんでした。話は尽きず1時間を超えていろいろなお話を聞くことができました。なかなか全てをお伝えすることはできませんが、何かの形で残していかなばならないと感じます。機会がありましたら、また皆さんにもご披露できればと思います。